

## 佐藤春夫関係日記翻刻（一）

—明治三十七年春夫日記・大正元年秋雄日記—

河野 龍也

### はじめに

ここに紹介する資料は、文京区関口の佐藤春夫旧邸跡に建つ佐藤方哉邸（春夫長男、一九三三～二〇一〇）に保管されていた佐藤家の日記類である。

二〇一五年三月、実践女子大学文学芸資料研究所は、ご家族高橋百百子氏のお許しを得て撮影し、同年四月、その写真を新宮市立佐藤春夫記念館が公表した。

春夫日記の発見については、四月八日正午のNHKニュース及び翌日の各紙によって全国的に報道さ

れた。『佐藤春夫読本』（辻本雄一監修・河野龍也編、二〇一五・一〇、勉強出版）の口絵にも一部収録した。しかし、日記の全容についてはこれまで未紹介のままであった。全文翻刻は今回が初めての公開となる。

これらの日記類は、春夫の父豊太郎が、三人の子に家庭教育の一環として書かせたものと見られる。長男春夫の日記は綴じ紐のない状態で見つかったが、いずれも左下欄外に「新宮<sup>宮</sup>製」の刻印がある青の二十四行和罫紙二十七枚に毛筆（一部鉛筆）で書かれており、一九〇四（明治三七）年一月一日から七月二十九日まで

の一連の記述を確認することができる。これには豊太郎が無地の半紙に毛筆で「一寸光陰不可軽」と題した表紙が一枚附属していた。

次男夏樹の日記は、一九二三（大正二）年三月七日に新宮を出発、上京し、早稲田予備校に通った当時のものが無表紙で綴じられていた。同年六月二十七日までの記述と、別にバラで翌年一月六日から二月五日までの記述が確認できた（共に欠あり）。前者は柱に「佐藤醫院」とある青の片面十三行両面刷洋野紙を使い、後者は左下欄外に「10—24長尾製」の刻印がある青の四八〇字詰原稿用紙を使っている。いずれも筆記用具はペンを用いている。

三男秋雄の日記は、二冊分の冊子と断片からなる。一冊目は豊太郎が墨書した「遊学日記」の表紙を持つ一九二二（大正元）年九月四日から十二月三十一日までの一連の記述で、後から紐で綴じてあった。二冊目は「遊学日誌」の表紙を持つ一九二三（大正二）年一月一日から六月二十一日までの記述で、同様に綴じられてい

た（三月一日—九日欠）。発見時、これらの分類には錯綜が見られ、前者のあとに後者の五月二十二日以降の部分が綴じ込まれていたほか、後者の中に夏樹日記の一部（一九二三年三月十五日—二十五日）が混入していた。そのほか、未整理の書類の中から一九一三年十一月十八日から十二月二十五日までの断続的な秋雄日記が見つかった。筆記用具はすべてペン。用紙の種類と使用時期は次の通りである。

- ・一九二二年九月四日—十月二十五日  
「佐藤醫院」片面十三行両面青野紙
- ・一九二二年十月二十六日—十二月一日  
「12 25池田屋製」六〇〇字詰青野原稿用紙
- ・一九二二年十二月二日—一九一三年一月十三日  
「十行廿字池田屋製」四〇〇字詰青野原稿用紙
- ・一九一三年一月十四日—二月二十六日  
「10—20長尾製」四〇〇字詰青野原稿用紙
- ・一九一三年二月二十六日—二月二十八日

- 「十行20字牛込ウス井製」四〇〇字詰青野原稿用紙
- ・一九一三年三月十日～三月二十日
- 「佐藤醫院」片面十三行両面青野紙
- ・一九一三年三月二十一日～四月十日
- 「十行20字牛込ウス井製」四〇〇字詰青野原稿用紙
- ・一九一三年四月十一日～四月二十四日
- 「10 20 大」四〇〇字詰青野原稿用紙
- ・一九一三年四月二十五日～五月十日
- 「10 20 小川町美濃屋製」四〇〇字詰青野原稿用紙
- ・一九一三年五月十一日～五月二十一日
- 「12 25 大」六〇〇字詰青野原稿用紙
- ・一九一三年五月二十二日～六月二十一日
- 「十行20字牛込ウス井製」四〇〇字詰青野原稿用紙
- ・一九一三年十一月十八日～十一月二十五日
- 「10 20 牛込ウス井製」四〇〇字詰青野原稿用紙
- ・一九一三年十二月七日～十二月二十五日
- 「10 20 長尾製」四〇〇字詰青野原稿用紙

夏樹と秋雄の日記は、表紙や本文の内容から見ると、豊太郎が東京生活の報告として定期的に郵送させていたものだと分かる。春夫の東京日記は見つかっていないが、二人の兄弟と同居していたため、彼らの日記から春夫の動静を側面的に知るができる。文壇登場以前、文学修行期にあたる慶應義塾在学中の春夫の生活には不明な点が多く、これまでは本人の回想や伝説化された風説だけが頼りだった。そこへリアルタイムの最も信頼できる伝記資料として日記が現れた。才能の揺籃期に誰と往来したかが分かることは大きな収穫である。

### 春夫日記について

ここで今回紹介する資料のうち、「明治三十七年春夫日記」（以下『日記』）に関して述べておきたい。これは佐藤春夫が新宮高等小学校を卒業し、新宮中学校に入学した時期を含む十三歳（満十一・二歳）当時の生活記録

である。父・豊太郎の字で「一寸光陰不可軽」と題した表紙には、「日誌ハ毎夜就褥前必ス記スベシ」(日誌ハ事実ヲ有ノ儘記スヘシ) (日誌ハ事実ニ就テノ感想ヲ飾カザラズ記スベシ)の三ヶ条の注意書きが付されており、当初の春夫はこの教えを忠実に守り、日記の記述は一九〇四(明治三十七)年の元日から始まっている。

この頃の春夫の住まいは父が病院を構えていた新宮城址「城山」の登り口にあり、熊野灘に面した熊野地方面へと続く町はずれの「登坂とどろか」と呼ばれる峠道に沿っていた。「城山」近辺の豊かな自然の中で遊びまわっていた春夫の様子は、後年の自伝的小説「わんぱく時代」(『朝日新聞』一九五七・一〇・二〇) (一九五八・三・一七)に描かれた「須藤」少年たちの日常を彷彿とさせるものがある。中にはベースボール(二月十四日)やテニス(二月二四・五・三十一日、三月六・二十日、四月十日)を楽しむ記述もあり、活発なスポーツ少年だった一面をのぞかせている。また少し意外なところでは、この頃の春夫に鉱物収集の趣味があったことも分かる。「城山」の裏

手にまわり、熊野川河口に面した小浜の漁港近くにある石灰小屋を見に行ったり(三月二十一日)、コレクションの一部を友人に分けたりしている(七月八日)。(石灰石、方解石の結晶が、彼の小さな頭に自然の神秘を教へた)という『田園の憂鬱』(一九一九・六、新潮社)の一節に符合する記述である。

一方、読書に関しては博文館の『少年世界』(一月三〜五日)や新少年社の『新少年』(七月六日)など、一般的な少年雑誌を読む程度で、日記の上から特段文学に目覚めた形跡を窺い知ることはできない。後年の回想『詩文半世紀』(一九六三・八、読売新聞社)の冒頭にある次の一節と比較して考えるべき問題がここにある。

明治二十五年生まれの、わたくしが十二歳で旧制の中学校へ入学に際し、口頭試問で将来の志望を問われて文学者と答えたというのは伝説ではなく、正真正銘の事実である。／もし更に文学者とは何かと問われたら、きつと本を書く人とぐらいいしか答え

ることでもできなかったであろうが、ともかくもそれぐらゐな単純な認識ながらもわたくしは子供の時から、本を書く人というものにあこがれていた。／＼というのは、わたくしは中学へ入学の前ころから、身の丈ほども書物を読んでいたからである。といつても、もとより子供の読みものらしい本ばかりではあつた。例えば巖谷小波の『日本お伽噺』、世界お伽噺、それぞれの全部や、押川春浪の冒険小説のたぐい（それらが、その当時の子供や、やや大きな子供たちの読む本のすべてであつた）。そのほかに木村鷹太郎訳のバイロンの「海賊」があつて、これはそのほかのどの本よりもわたくしには面白く、血をわかせ肉を躍らせたものであつた。

『詩文半世紀』には続けて、これらの本を貸与してくれたのは、父の病院の上等三号室に結核で入院していた年上の少年患者（大前十郎）であつたこと、またその兄の見舞いに訪れる妹（俊子）に淡い恋心を自覚したこ

となどが抒情的に出てくる。中学入学の時期を挟むこの『日記』はちよつどその頃の記録なのだが、問題の口頭試問や病室の少年患者に関する記載はまったく確認できない。もつとも、記録に省略があることや、後年の記憶に時期的なズレがある可能性を考えれば、『日記』に記載がない故をもつて『詩文半世紀』の記述を作りごとと即断することはできないだろう。

さて、人に強いられた習慣を維持するのは困難なものである。春夫少年の場合もその例に漏れず、中学入学直後の四月下旬から（記スベキ事ナシ）の一行の記事で日記を済ませるようになる。面白いのは、これを見てあきれた父が、（斯クノ如クシテ一生ヲ送ツタナラバ此世ニ生レタル甲斐カナイ）、そして（其日々々ノ仕事ト考）がない者は（米食虫 悪ク言ハハ造糞器）だと、十二行に及ぶ説教を書き込んでいることである（七月四日）。しかし、その日の春夫の記事をよく読んでみると、（日誌ノ事テ父ニ笑ワレタ）と出てくる。文字だけを見れば言葉つきは厳しいが、父は笑顔で叱っていた。

さすがに春夫もこの後は、真面目に日記を再開している。欄外を見ると、(二日間ノ記事 先ツ吾カ意ヲ得タリ 頑父)と書き込まれている。努力する息子の姿を見て、父も励ましの言葉を忘れない。頑固おやじと自ら名乗り、冗談まじりにやる気を引き出す豊太郎の指導からは、「梟睡」を名乗った俳人の余裕を感じ取ることができる。

ただ、これらのやり取りは、この『日記』の性格を考える上で忘れてはならない事実の存在に気づかせてくれる。それはこの『日記』が「頑父」を自称する父に向けて書かれたものだということだ。まだ中学一年生であった『日記』の作者にとつて、常に父が読者として存在していたことは、相当なプレッシャーとなっていたことだろう。当時の日記が修養を目的に書かれたことにも注意しなくてはならない。

実際、春夫は日記がいつ点検されても困らないよう、文字の上で「殊勝な息子」を演じようとしている。例えば、遊びすぎて勉強を怠った日の翌日には、(遊まなぶンデ学

ノハオモシロクヨクオボヘル)(二月一日)と、父に咎められる前に先回りして予防線を張っている。あるいは、級友がメジロの世話で英語の講習に遅刻すると、(小鳥ナドハ学生ノカウベキデナイト思ヒマシタ)(二月五日)としかつめらしくタテマエを書いている。しかし、そのわずか九日後には、(目白ヲオトシニ行キマシタ)(二月十四日)とつい筆を滑らせてしまう。そのうち日記が面倒になって(記スベキ事ナシ)を連発し、小言を貰って反省する。春夫にとつて、『日記』はある種、父との駆け引きの場になっていった観がある。

歴史資料として興味深い点もある。それはこの『日記』が日露戦争当時を過ごした一少年の生活記録になっている点である。記事の中には(号外ノチリンチリントゴ一外ガキタ故見ルト日口開戦我軍大勝利)(二月九日)と、前日の日露開戦の第一報に興奮する様子や、(私ハ号外ガクル毎ニ旅順ノ陥落ヲ待ツ)(六月四日)と戦果を心待ちにする様子が出てくる。

前述の新聞小説「わんぱく時代」の執筆に際して春夫

は、川端龍子の挿絵用に、新宮で写真館を営む旧友の久保嘉弘から風景写真を送ってもらうなど入念な準備を行っていた。一九四二（昭和十七）年に亡くなった父から引き継いだこの幼い日の日記も、執筆資料の一つとして机上にあった可能性がある。

子供の戦争ごっこを描く「わんぱく時代」のなかで春夫は、勝利の味に酔い、遊びがいつしか殺伐とした暴力の応酬に変化していった様子を取り上げている。そして主人公の「須藤」少年に、「いつのまにか戦争の方が人間を支配しはじめ」、〈押へきれないものになつて人間をひきずりまはして行く〉と、人間が始めた戦争の恐ろしさを語らせている。それは日露戦争の戦果を無邪気に喜んでいた少年時代の自分にむかつて、第二次世界大戦での敗戦を経験した春夫が静かに語りかけた、時を超える自己との対話であったように思われるのである。

（以下続稿）

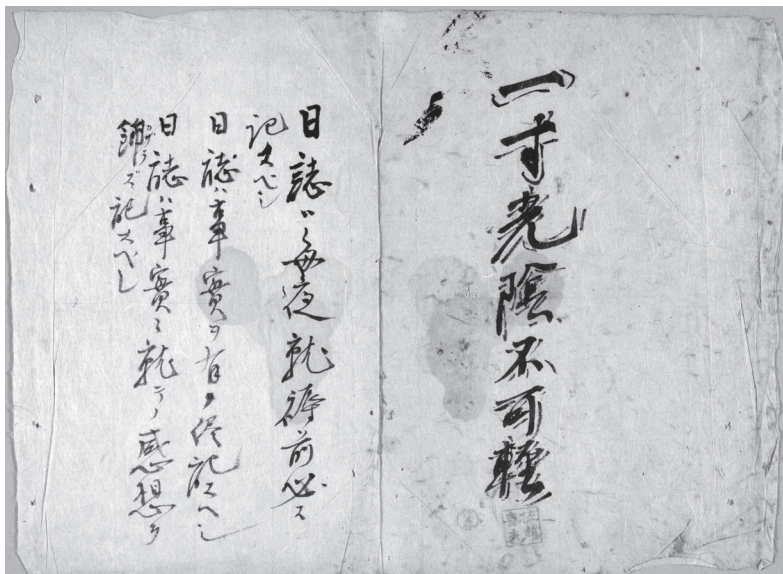
凡例

・ 漢字は一部の異体字を除いて原則常用漢字に改めた。誤字と思われるものには「ママ」もしくは正しい文字を（ ）で併記し、脱字は本文中に「」で補った。原文の仮名遣いには棒引き仮名遣いのほか、変則的なものが散見されるが、原文のままとした。

・ 原文では句読点が省略されている場合が多い。読みやすさに配慮し、句点があるべき箇所は一字分あけて文の切れ目を明示した。原稿用紙に書かれた日記にも同様の処理をした。また、日付に続く本文の文頭は字下げ処理をして体裁を統一した。「」は内容から「」、「」に置き換えてある。原文の改行箇所は文脈により追いつみにしたところがある。

・ 『佐藤秋雄日記』は冊子として綴じられていた。この状態を尊重し、日記と共に父のもとに送られ、一緒に綴じ込まれていた手紙類も、綴じ込まれていた位置に翻刻を挿入しておいた。それらは日記本文と区別するために枠で囲ってある。

・ 日記中には今日の人権意識に照らして不適当な記述が存在する。しかし、筆者が故人であることと、原状の日記を歴史資料として正確に伝えることの意義に鑑み、本文には前記読解の便宜を図るためのものを除き、内容に関わる削除・改変等の加工を施すことはしなかった。編者の意図するところを汲み取っていただければ幸いである。



佐藤春夫日記(明治三十七年)

【表紙】

一寸光陰不可軽

印〔\*佐藤春夫〕

印〔\*佐藤〕

日誌ハ毎夜就褥前必ス記スベシ

日誌ハ事實ヲ有ノ儘記スヘシ

日誌ハ感想ヲ飾<sup>カガ</sup>ス記スベシ

【本文】

卅七年一月一日 金曜 晴天 華氏六十一度

朝六時起ントセシニ母ニ止ラレ六時三十分寢床ヲ出  
 デ、先第一ニ空ヲナガメシニ一ツノ雲モナクハレワ  
 タツテ居タノデ又家ニ入ツテ著物ヲ著タ

「雑ニヲ祝ヒテ後学校ヘ行カント門ニ出シニ処々ノ松  
 カザリハ喜瑞ヲ表シ又戸毎ノ旭旗ハ国威ノ盛ナノヲ  
 表シタル如ク見ヘナク雀ノ声サヘイトウレシゲニキ



コエル 八時四十分学校ニ行テ拝顔式ヲ行ヒ終テ請  
川君等ト年始週リニ行 再ビ行 ヒル飯後双六ヲナ  
シテ遊ンダ後夜双六ヲシタ 八時寝ニ付ク

二日 土曜 晴天 五十九度

朝七時二十分父ノ為ニ起サレ朝飯後テ、ニ、スナシテ遊ビ  
ヒルカラテテ、マ、ニ、ス、ヲナシ夜双六ヲナシ七時半寝付ク

三日 日曜 晴天 五十八度

朝八時起キ朝飯ヲスマシテ少年世界ヲ読ミ後登阪へ  
遊ビニ行キ沐浴シ夜六時寝

四日 月曜 晴天 五十五度

朝九時起キ沐浴シ朝飯ヲ終リ少年世界ヲヨミヒルカ  
ラハテニスヲナシ夜双六ヲナシテ七時寝付ク 雪フ  
ル

五日 火曜 晴天 五十三度

朝七時五十分起キ朝飯後山へ行キヒルカラ。第一デ  
テニスヲナシ家ニ返ヘリ沐浴後ユーメシヲ食ヒ後少  
年ヲヨミ七時寝

六日 水 晴 五十二度

朝七時半起キヒルマデ家ニテ遊ビヒルカラ帳ヲカヒ  
キ行 <sup>(三)</sup>カヘリテ沐浴シ今日ハ少シ早カッタガ六時寝

七日 水 晴 四十八度

朝七時起キ今日ハ始業式ナレバ八時学校ニ行キ式ヲ  
スマシテ中口ノムツヨマイリニ行ク 五時カヘリ七  
時寝

(金) 八日 晴 四十二度

今日ハ学校ガ有ル故八時半学校ニ行キ算術英語図画  
等ヲ修メ三時半カヘリソレヨリ英語習ニ行キマシタ  
夜勉強後九時寝付ク

(土) 九日 晴 夜雨フル 四十六度

朝七時半ニ起キ八時半学校ニ行ク 算術国語習字等  
ヲ修メ三時家ニカヘル ソレヨリ英語ヲ習ニ行キマ  
シタ 家ニカヘリ沐浴シ夜ハ七時寝付ク

(日) 十日 晴 五十七度

朝八時起キ朝カラヒル込山ニテ遊ビヒルカライノド  
へ遊ビニ行キソレヨリ帰り沐浴シ後勉強シ九時寝

(月) 十一日 晴 五十九度

朝七時起キ学校ニテ地理英語修身国語等ヲ修ム 返  
ヘリ英語ヲナラヒニ行キカヘリテ沐浴ス<sup>(⑤)</sup> 夜勉強シ  
九時寝府ク

(火) 十二日 晴 六十二度

朝七時過ぎ起キ八時半学校ニ行ク 算術国語習字  
等ヲ受ク カヘリ英語ヲナライニ行ク 五時帰ル  
十一時寝ル

(水) 十三日 七時半起キル 八時半学校ニ行キ歴史英

語算術図画ヲ理科ヲ学ブ 晴天ナリシ 英語ヲ習ヒ  
ニ行キ五時カヘリ七時寝ニ付ク ソレハ昨夜オソク  
ネタ故デアル

(木) 十四日 晴 五十四度

七時半起八時半学校ニ行キ算術修身歴史等ヲ修ム  
英語ヲナラヒニ行キ五時カヘリ夜九時寝

(金) 十五日 晴 五十一度

七時半起キ八時学校ニ行キ算理科英語図画等ヲ修ム  
今日英語ヤスミ 九時寝  
(土) 十六日 晴 五十六度

七時半起キ八時半学校ニ行キ習字国語作文等ヲナシ  
三時英語ヲナラヒニ行ク 五時カヘリ七時半寝タ  
(日) 十七日 晴

朝八時起キヒル込山ニテアソビ本ヲカタズケヒルカ  
ラ徴兵ヲ送テ行キ三時カヘリ沐浴シ<sup>(⑤)</sup>夜八時寝  
(月) 晴 五十一度

朝七時半起キ八時半学校ニ行キ修身体操地理英語国  
語ヲ修ム 三時カヘリ三時半英語ヲ習ヒニ行ク 五  
時カヘリ夜九時寝ニ就ク

(火) 晴 夜二至リクモリテキタ 四十九度

朝八時起キ八時半学校ニ行キカヘリテ英語ヲ習ヒニ  
行ク 四時半カヘリ夜九時寝

(水) 二十日 晴

朝七時半過ぎ起キ八時半学校ニ行ク カヘリテ英語  
ヲ習ヒニ行ク 五時カヘリ夜十時寝

(木) 二十一日 晴 四十九度

朝七時四十分起キ八時半学校ニ行キ三時カヘリ英語  
ヲ休ミテソー式ニ行ク 四時半カヘリ夜八時半寝ニ

付ク

(金) 二十二日 晴

朝七時五十分母ノ為ニ起コサレ八時半学校ニ行キ金曜ノ受業ヲ受ケテ三時カヘリ英語ヲ習ヒニ行キ五時戻ドリ夜九時寝

(土) 二十三日 晴 五十二度

朝八時頃起キ八時三十五分学校ニ行ク 三時英語ヲ習ヒニ行キ五時カヘリ夜八時寝

(日) 二十四日 晴 三十九度

今日ハ日曜ニテ天気善カリシカバ朋友四五輩ト宇和野ナル西朝生君ノ宅ニ行ク 午後〇時三十分新宮ヲ出で川ヲ渡リ山ヲコヘテ二時宇和野ニ著ス 種々ノ遊ビヲナシケルニ日西山ニカタブキケレバワカレヲツゲテ途ヲイソグ 帰途歌等ヲ唱ヒツ、カヘリケリ 日没ミハテシ後ノ五時ナリキ  
..... 夜九時寝ニ付ク

(月) 二十五日 晴 四十五度

別ニ記スベキコトナシ..... 雪フル 朝七時

四十分起キ夜九時寝

(火) 二十六日 晴

朝七時半起 八時四十分学校ニ行ク 三時カヘリ英語ヲ習ヒニ行ク 夜八時半夜

(水) 二十七日 晴 四十七度

朝七時半起八時半学校ニ行ク 水曜ノ受業ヲ終ヘ三時カヘリ三十分英語ヲナラヒニ行キ四時半カヘリ夜九時寝ニ付ク

(木) 五十三度 二十八日 雨

朝八時起キ八時二十分学校ニ行キ三時カヘリ英語夜九時寝

(金) 二十九日 四十三度 雨

朝七時五十分起八時半学校ニ行キ三時カヘル 今日英語休ミ

(土) 三十日 雨 孝明天皇祭

朝カラヒルマデ机ノソージヲナシヒルカラソー式ニ行ク 五時カヘリ六時半寝ル

(日) 三十一日 五十八度 晴

朝西君玉置辻阪杉本大久保君等来り種々ノ談ヲナシ  
十一時四十分皆ゴゼンヲタベニ行タ ヒルカラハ迫  
間ヤ西玉置等来テ色々ノ討論ヲナシ後テニスヤナハ  
ドナドヲシテ二時五十分一同カヘツタ 楽シク一日  
ヲ送タ マタハゲマン……………九時寝ニ  
就ク

(月)二月一日 五十四度 晴

朝七時過父ノ為ニ起サレ八時学校ニ行タ 三時ニカ  
ヘリ三時半英語へ行タ 又今日モ休ミ 後勉強シタ  
昨日ノ御陰デヨクオボヘル 遊ンデ学ノハオモシロ  
クヨクオボヘル……………九時十五分寢床ニ入ル

(火)二日 晴

朝七時母ノ為メニ起サレ八時学校ニ行タ 三時学校  
カラカヘツタ 五時英語ヨリカヘリ夜八時半寢ニ付  
ク

(水)三日 晴

朝七時半又母(ノ)為メニ起サレ八時学校へ行キ三時  
ニ英語へ行キ四時半カヘツタ 夜八九時寝ニ就ク

(木)四日 晴

朝ネスギテ八時起キ八時半学校へ行キマシタ 三時  
半英語カラカヘリ夜十一時寝タ 今日ハ於榮さんノ  
ヨメ入デアツタ故タ

(金)五日 ドン

今日英語へ行キマシタ所ガイツモ皆早ノニ今日ハ如  
何シテオソインデアロト思ツテイマシタトコロガ  
目白ヲコーテアル故デアツタ 其時私ハトリナドヲ  
カウト習ニクルノマデオソクナル 小鳥ナドハ学生  
ノカウベキデナイト思ヒマシタ……………

(土)六日 晴天

記スベキヲモナシ……………明(日)ハ日曜イカニ面白  
キ夢ヲ結バン

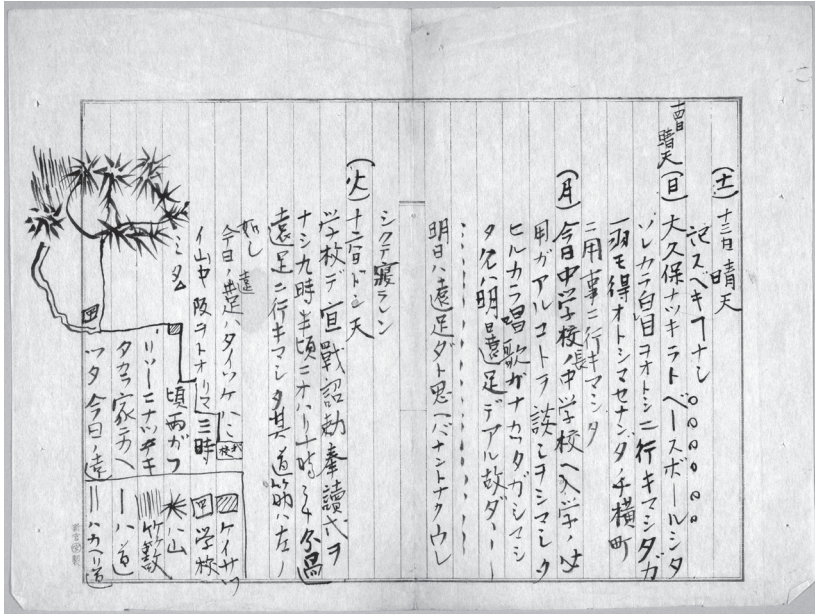
(日)七日 晴天

一日山デユカヒ二日ヲ送タ

(月)八日 晴 別ニ記スヘキホドノモノナシ

(火)九日 晴天

夕ノ六時半頃号外ノチリンチリントゴ外ガカタ



(土) 十三日 晴天  
 記スベキヲナシ

(水) 十日 晴天  
 故見ミルト日口開戦我軍大勝利敵艦二隻ヲ撃沈シタ  
 万歳大勝利

(木) 晴天 十一日  
 今日ハ紀元節ダカラ着物をキカヘ式ヘ行タノハ八時  
 頃 式デハ勅語ヲ初メ川島校長ノ祝辞紀元節ノ歌ヲ  
 唱ツテ式ガ終ヘマシタ 今日大浜デ軍人ノ運動会ヲ  
 シマシタカラ朋友二三輩ト行タノハ十二時 イロ  
 ノ運動ヲ見テ三時カヘツタ 今日ハ愉快デアル

(金) 十二日 晴天  
 別ニ記スベキホドノコトナシ

(土) 十三日 晴天  
 記スベキヲナシ

十四日 晴天(日) 大久保ナツキラトベ。ス。ポ。ール。シタ

(金)十九日 晴天

ソレカラ目白ヲオトシニ行キマシタガ一羽モ得オト  
シマセナンダ ノチ横町ニ用事ニ行キマシタ

今日英語ガヤスミ ソレハ今日軍人ノ戦勝祝ガアリ  
マシタ故デアル

(月) 今日中学校長ノ中学校へ入学ノ必用ガアルコトヲ

夜球燈行例ガアリマシタカラ見ニ行キマシタ

談シラシマシタ ヒルカラ唱歌ガナカツタガシマシ

(土)二十日 雨天

タ ソレハ明日遠足デアル故タ……………

記スベキホドノコトナシ

明日ハ遠足ダト思ヘバナントナクウレシクテ寝ラレ

(日)二十一日 雨天

ン

今日ハ高食神社ノ火祭デシタガ雨ノ為メ見ニ行クコ

(火)十六日 ドン天

トガデキマセナンダガ三四吉君ヤ大久保君ラトオモ

学校デ宣戰詔勅奉讀式ヲナシ九時半頃ニオハリ十時

シロイハナシシテ遊ビマシタ

二十分過遠足ニ行キマシタ 其筋ハ左ノ如シ

(月)二十二日 晴天

今日ノ遠足ハタイソ〔一〕ケハシイ山ヤ阪ヲトオリマ

今日ハ昨日トヒキカヘテ上天氣デシタ 今日ハ三社

シタ 三時頃雨がフリソーニナツテキタカラ家ニカ

マイリデアアルカラ学校ガヤスミ ヒルカラ高倉神社

ヘツタ 今日ノ遠足ハタイソ一面白カッタ

ヘ参拜シマシタ

(水)十七日 晴天

(火)二十三日 晴 記スベキコトナシ 英語ガヤスミ

今日英語ガヤスミ……………ホカニ記スベキコトナシ

(水)二十四日 晴天

(木)十八日 晴天

別ニ面白キ記ベキホドノコトナシ

記スホドノコトナシ

(木)二十五日 晴

別ニ記スベキホドノコトナシ

(金) 二十六日 晴天

別(二)面(白)キコトモナシ

(土) 二十七日 天アマ

今日講堂デ川島校長カラ日露戦争ノ由来カラ仁川ノ海戦ヤ旅順ノ海戦等ヲ話シテモラツテ我軍人ノ忠勇ナコトモ魯軍ノ油ダンナシタコトナドガ皆ワカリマシタ 油断ハ大敵ダ……………今日英語ヲヤスンデ尾畑ノソー式ヘ行キマシタ

(日) 二十八日 雨天

今日ハ日曜ナレド雨天ナレバ記スベキホドナコトモナシ

(月) 二十九日 晴天

記スベキコトナシ

一日(火)晴天

記スベキコトモナシ

(水) 二日 ドン天

今日川島校長カラ日露戦争ノ前ノツバキヲシテモラ

ヒマシタ 日本人ハ忠勇デアアル

(木) 三日 晴天

今日ハ別ニ記スヨ一ナコトモアリマセン

(金) 四日 晴天

別ニ面白キ記スベキコトモナシ

(土) 五日 雨天

別ニ記スヨ一ナコトモアリマセンガタゞ国語ノ試験ヲシマシタ

(日) 六日 晴天

今日ハテニスヲシテ一日ヲ愉快ニオクリマシタ 今日召集令ガ下リマシタ

(月) 七日 晴天

今日ハ三月ノ初ノ月曜デアリマスカラ講堂修身ヲイタシマシタ ヤハリ戦争ノコトノ話ヲシマシタ 後学校ノキマリヲカヘタコトヲハナシ、マシタ イチバンシマヒノ時間ニ大ソージヲシマシタ

(火) 八日 ドンテン

今日召集シラレタ人ヲオクルノガアタリマヘデアリ

マ스가キソクデオクリマセナンタ シカシ英語ガヤ  
スミ

(水)九日 ドン天

別二記スベキヲモナシ タゞ算術ノ試験ヲシマシタ  
皆ナ合ヒマシタ ウレシイ

(木)十日 晴天

別二記スベキヲモナシ

(金)十一日 雨天

今日理科ノ試験ヲシタ 今日モ皆合テウレシイく  
く

(土)十二日 雨天

記スベキヲモナシ

(日)十三日 雨天

今日ハ号外ガ三ツモキタ 一ツハ旅順大レンヲコー  
ゲキシ敵船ニ損害ヲ加タトデアツタ 又一ツハ是レ  
ノ公ホー一ツハソレノツゞキデ我ノ傷者二十名アツ  
タガ我軍大勝利

(月)十四日 晴天

今日モ号外ガキタ ソレハ大日本帝国大勝利 旅順  
陥落シ敵兵退却ストデアツタ

(火)十五日 晴

今日カラ英(語)ガヤスミ

(水)十六日 晴

記スベキヲモナシ

(木)十七日 晴

記スベキヲナシ

(金)十八日 雨天

記スベキヲナシ

(土)十九日 雨天

記スベキヲナシ

(日)二十日 晴天

今日ハ一日テニスバカリシテ愉快ニ日ヲオクリマシ  
タ 又アスモヤスミカ ウレシイナ

(月)春季皇靈祭 二十一日

今日ハ天気ガヨイノデ大久保ト二人デ城山ヘ遊ビニ  
行キマシタ ソレカラ小浜ノ方ヘ下リテ石灰ヤクト



コロヲ見テカヘツテキマシタ 其レカラヒルウ殿へ  
遊ビニ行キマシタ

(火) 今日アサ陸戦我軍勝利テキニ六百ノ死傷アリトア  
ツタ 愉快くくくくく

(水) 二十三日 雨

別ニ記スベキヲナシ

(木) 二十四日 雨

今日九時カラ修業シヨシ証書受与式ヲイタシマシタ

私ハ賞ヲ受ケマシテ一日愉快ニ日ヲオクリマシタ

アスカラ休ミ

(金) 二十五日 晴

今日天気ガヨカツ(夕)故シロヤマへ遊ビニ行キマシタ

(土) 二十六日 晴天

記スベキヲモナシ

(日) 二十七日 晴

今日姉ハンガクルト云ヒマシタノデ二時頃秋雄ニカ  
クレテ三輪崎(へ)行キマシタ 三輪崎へ着タノハ三  
時 ソレカラ長ガヒアイダマツテモキマセンノデツ

ラカツタガ八時頃キマシタノデヨロココンデ車へ乗テ  
キマシタノハ九時 其ヨリ一時間タツテ十時家ヘツ  
キマシタ

(月) 雨天 二十八日

記スベキヲモナシ

(火) 晴天 二十九日

今日アタマガイタカツタカラ一日寝マシタ

(水) 晴天 三十日

記スベキヲナシ

(木) 晴天 三十一日

記スベキホドノコトモナシ

四月(金) 晴天 一日

記スベキヲモナシ

(土) 晴天 二日

記スベキヲモナシ

(日) 晴天 三日

今日朝手ジュツヲ見ヒルカラ西朝生君ガキマシタカ  
ラ共ニ玉置徐歩君トコヘ遊ビニ行マシタ

(月) 四日 晴天

記スベキコトモナシ

(火) 五日 雨天

今日頭ガイタカッタカラヒルカラ寝タ

(水) 六日 晴天

今日入学式(中学校の)デアツタノデ七時半ゴロ行マシタ 八時式ガハジマリ第一ニ木村中学校長演舌第二生田先生中学入学後ノ心得 ソレカラ秋月先生ノ服ソノコトノ注意デ式ガ全ク終リマシタ

(木) 七日 晴天

今日始業式へ行キマシタノハ八時 学校ノ式ガハシマリ木村校長ノハナシデ式ガ終ツタ 中学校へ入学シタ以上ハコレカラマス〜ベンキオセネバナラント思フ

(金) 八日 晴天

今日カラコト業ガ如リマスノデ学校へ行キマシタ ヒルカラ頭ガイタテ寝マシタ

(土) 九(日) 晴天

記スベキコトモナシ

(日) 十日 晴天

今日ツレガアソビニキタノデ三人デ城山へオガツテケシキヲ見ソレヨリテニスニシテアソビマシタ

(月) 十一日 晴天

頭ガイタカツタノデ寝タ

(火) 十二日

記スベキコトモナシ【\*十一日と入れ換え記号あり】

(水) 十三日 晴天

今日中学校ノ校舎ヲ見物シタ 中学校ハ高等トチガツテヨホド校舎ガヨイ コノヨナガツ校ヘイルコトガデキタノモ父母ノオン 思へバ励強スベシ

(木) 十四日 雨天

今日博物館カアツタ 博物館ノ先生ハ一番生徒ニオシエルコトガウマイ コレヨリ後モカヨナ先生ニナライタイ

(金) 十五日 雨天

記スベキコトモナシ

（土）十六日 雨天

今日青木ノソー式へ行キマシタ

（日）十七日 雨天

記スベキヲモナシ

（月）十八日 雨天

今日松野ノソーシキへ行キマシタ

（火）十九日 雨天

記スベキヲナシ

（水）二十日 晴天

今日姉サンガ和カ山へ行キマシタ

（木）二十一日 晴

記スベキヲナシ

（金）二十二日 晴天

今日ノ午前二時前バ化新道ヨリ出火 同二時チン火

ス 全焼十六戸

（土）二十三日 晴天

記スベキヲナシ

（日）二十四日 晴天

記スベキヲナシ

（月）二十五日 晴天

記スベキヲナシ

（火）二十六日 晴天

記スベキヲモナシ

（水）二十七日 晴天

当日ハ發行ノ創立第四回紀念日デアッタカラ式ガア

ツタ 式ガスンデカラロ、ト、ン、テ、ニ、ス、ノ大会ガアツタ

（木）二十八日 雨天

記スベキヲナシ

（金）二十九日 雨天

記スベキヲナシ

（土）三十日 晴天

記スベキヲナシ

（日）五月一日 晴天

今日狭間君トウワ野ノ西君ノ家ヘアソビニ行キマシ

タ 又本日九連城占領ノ広報アリ

（月）二日 雨天

記スベキヲナシ

(火)三日 雨天

記スベキヲナシ

(水)四日 雨天

記スベキヲナシ

(木)五日 雨天

記スベキヲナシ

(金)六日 晴天

本日アイスジニ火事ガアツタ 今日第一尋常デ時局

ゲン燈会ヲ見タ

(土)八日 記スベキヲナシ

コレヨリ(六月)一日マデ記スベキヲナシ

(水)一日 晴天

記スベキモナシ

(木)二日 晴天

記スベキヲナシ

(金)三日 晴天

記スベキヲナシ

(土)四日 晴天

今日熊実社ノ号外ニ元山方面ノ衝突ガアツタ 私ハ

号外ガクル毎ニ旅順ノ陥落ヲ待ツ【\*「衝」のみ鉛筆】

(日)五日 晴天

記スベキヲナシ

(月)六日 晴天

記スベキヲナシ

(火)七日 晴天

記スベキヲモナシ

(水)八日 晴天

記スベキヲナシ

二十頃<sup>マイル</sup>ニヨリ【\*この行より三日まで鉛筆。三十日まで

日付と曜日ニに齟齬あり。】

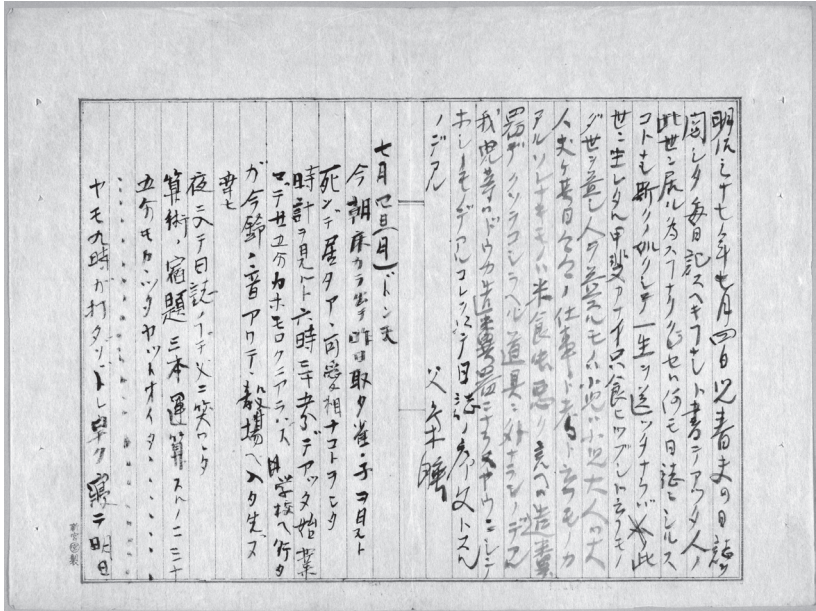
(月)二十六日 雨 記スベキヲモナシ

(火)二十七日 雨 記スベキヲナシ

(水)二十八日 晴天 ヒサシブリノオ天気

(木)二十九日 晴 記スベキヲナシ

(金)三十日 晴 記スベキヲモナシ 今日初メテ水遊



ス

(土) 二日記スベキヲモナシ

(日) 三日 ドンテン

今日ハ初瀬戦死者岡崎キミ彦氏ノ葬儀ヲシタ 中学  
 校生徒モ小学校モ送ツタ 戦デ死んだ人ハ我々ニカ  
 ハツテ死タノデアル 我々国民深ク謝スベキダ

【\*父豊太郎の書き入れ】

明治三十七年七月四日児春夫の日記ヲ閲シタ 毎日記  
 スヘキヲナシト書テアツタ 人ノ此世ニ居ル為スヲナ  
 ククラセハ何モ日誌ニシルスコトナシ 斯クノ如クシ  
 テ一生ヲ送ツタナラバ此世ニ生レタル甲斐カナイ 只  
 食ヒツブシト云フモノダ 世ヲ益シ人ヲ益スルモノハ  
 小児ハ小児大人ハ大人丈ケ其日々々ノ仕事ト考ト云フ  
 モノカアル ソレナキモノハ米食虫 悪ク言ハハ造糞  
 器デクソヲコシラヘル道具ニ外ナランノデアアル 我児  
 等ハドウカ造糞器ニナラヌヤウニシテホシイモノデア  
 ル コレヲ以テ日誌ノ序文トスルノデアアル 父臬睡

七月四日(月)ドン天

今朝床カラ出テ昨日取タ雀ノ子ヲ見(ル)ト死ンデ居  
タ ア、可愛相ナコトヲシタ

時計ヲ見ルト六時三十五分デアッタ 始業マデ廿  
五分 カホモロクニアラハズ学校ヘ行タガ今鈴ノ音  
アワテ、教場ヘ入タ 先ズ幸ヒ

夜ニ入テ日誌ノコデ父ニ笑ワレタ

算術ノ宿題三本 運算スルノ二三十五分モカ、ツタ

ヤットオイタ……………ヤモ九時ガ打タ

ゾ ドレ早ク寝テ明日ハ早ク起キヨ——

七月五日(火)雨

昨日ニコリテ今日ハ大分早ク起キタ 今日大ソーア

ツカッタノデ気分ガワリカッタ 今日ゲン燈会ガア

ツタガ残念ナガラヨ一(カ)ナンタ……明日モ今日

ノ様ニ!

【\*上欄外】二日間ノ記事 先ツ吾カ意ヲ得タリ 頑父

七月六日(水)雨(\*六日分のみ鉛筆)

今日モ早クオキタ

今日新少年ガ来タノデ一日ソレヲヨシンデタノシンダ

又父ガ今日高芝ヘ行タ 此ゴロハスコシモ号外ガコ  
ンノデ面白クナイ 早ク旅順デモ陥レバヨイガ

七日(木)雨

今日昨日ヨリモオキルノガオソカッタ

又習字ノ清記ヲカイタガタイソーヨカッタノデ土曜  
日ガ待兼ル

八日(金)雨

六時前起キタトコロガ母ハ昨夜号外ガ来タト云フノ  
デ旅順ノ陥落デモ来カト勇デ見ニ行トコハ如何ニ我  
海防艦海門艦ガ敵ノ機械水雷ニカ、リテ没シタトノ  
事タ ナントナサケナイ 然シ一時失敗ニ力落テハ  
ナラント氣ヲトリナオシテ学校ヘ行タ

帰ニ水谷君ト一シヨニ帰テキテ礦物ノアツメタ中デ

氷ト一石ト石解石トヲヤツタ

夕方西見君所ヘ遊ニ行タ

九日(土)雨

今日校友会式デ保田宗次郎ノ演舌ガアツタガアマリ

感心モセナンダ

今晚ハ実ニ此マデナイ大風デ川ノ水モ随分増シテ損

害モ甚シカツタヨード

十日(日)雨

今日ハ一日作文ツクルノニカ、ツタガヨクモデキナ

カツタ 又昨夜ノカタスケデ内モイソガハシイ様デ

アツタ 夜ル日記ヲカキプリマヲヨンデ寝タ

十一日(月)雨

アサツテハシケンダカラ今日ハ一日サラエタ 常ニ

サラエサエスレバ今モイツモノ如ニサラエレバヨイ

モノヲ

十二日(火)雨

今日水谷君ガ遊ビニキテ共ニサラエタ 今日モヨル

ハ九時迄サラエタ

十三日(木)晴

今日ハイヨク試験シダ

試験ハ四モンダイデアツタ ソノ中ノ四バンノイ、

口、ハ、ニ、ト別タ中口、ガチガツタ シカシ自分

ノ不勉強トアキラメネバナラヌ

十四日(木)晴

今日宗城君ト水谷君ト遊ビニキタ故三時半頃マデサ

ラエソレカラ久シブリデ城山ヘ上ツテカエツテキタ

トキハ四時半頃デアツタ ツイ今出テ直ニ来タノニ

モ一時間モタツタ 日月ノ経ノハ早イモノダ

十五日(金)晴

今日試験シノ時間表ガケイジサレタ 木曜日から初メ

ルトノ事ダ 一番初ハ博〔物〕ダ ヤーコレハヨハツ

タトアハテ、家エ急デ走テ来テ餘イヲ食ベテカラ一生

懸命二十三ペジベンキョーシツタ

十六日(土)晴

今日ハ別ニ書クヨナ事モナイ シケン前デベン強

バカリシタ

十七日(日)晴

今日ハ日曜カラ少シモ外ヘ出ズニ博物計リサラエタ

十八日(月)

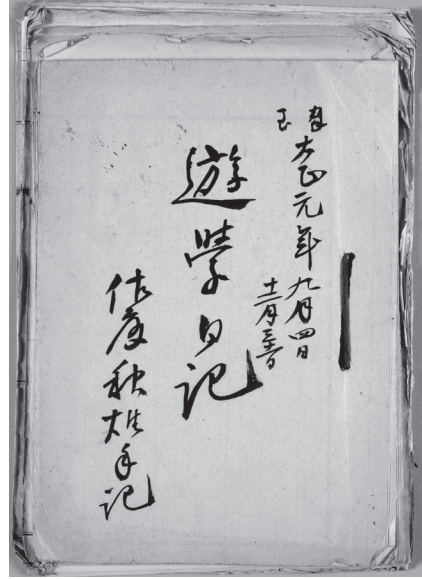
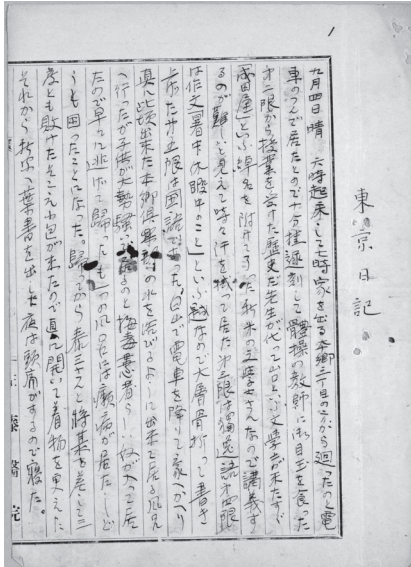
今日作文ヲモロータ 甲デアツタノデ帰テ直父ニ見

十八日(通) 物討ヤリテ又ハ一掃シテ  
 存作史チモヒト夕用テ御  
 御下直ニ退ヨト思テイタガヒル寝  
 ヲヒテオウ夕ノテ又セルノガオキヤリ  
 水谷メ今日来ルト云テ人ヲマダシテ  
 オモセシメテト  
 十九日ヨリ二十六日迄ハ 試劍ニテ  
 ニ記スヘキ一ナシ  
 二十六日今日ハ扇子祭テ夕方カラ速玉神  
 社ハ新宮沖ニアラハルタリトサワグ  
 我ハヨ一游ガんが面白ガツテ明日モ  
 二十七日(水) 我軍大石橋セン  
 記スル事ナシ 但我軍大石橋セン  
 リヨ一号外アリロカン新宮沖ニ  
 アニハルタリトサワグ余ハ城山ヘ  
 上テ見タガ唯キリバカリデ何モ見エナカツタ  
 二十八日(木) 今日コソハ実ニ記スベキナ  
 今日コソハ実ニ記スベキナ  
 二十九日(金) 晴 今日弟秋雄をトモ  
 今ノ第(宇) 秋雄をトモ登ルニ舟  
 鶴城ノ下ノコソニ入水遊ニ行夕秋  
 雄ハヨ一游ガんが面白ガツテ明日モ

第廿四巻

(七) ヨト思テイタガヒル寝ヲシテオツタノデ見セ  
 ルノガオソナツタ 水谷メ 今日来ルト云テ人ヲマ  
 タシテキモセンノニ……………  
 十九日ヨリ二十六日迄ハ試劍ニテベン強バカリ 記ス  
 ベキナシ  
 二十六日 今日ハ扇子祭テ夕方カラ速玉神社ヘコ  
 ケキヲ開初シタ 我ソソノガイ高五千(五錢)ナリ  
 二十七日(水) 記スル事ナシ 但我軍大石橋センリヨ一号外アリ  
 ロカン新宮沖ニアラハルタリトサワグ 余ハ城山ヘ  
 上テ見タガ唯キリバカリデ何モ見エナカツタ  
 二十八日(木) 今日コソハ実ニ記スベキナ  
 今日コソハ実ニ記スベキナ  
 二十九日(金) 晴 今日弟秋雄をトモなひて丹鶴城ノ下ノコソニ入水遊  
 ニ行夕 秋雄ハヨ一游ガんが面白ガツテ明日モ





佐藤秋雄日記（大正元年）

【表紙】

自 大正元年九月四日

至 十二月三十一日

游学日記

佐藤秋雄手記

【本文】

東京日記

九月四日 晴 六時起床して七時家を出る 本郷三丁目の方から廻ったのと電車をつんで居たので十分程遅刻して体操の教師に御目玉を食った 第二限から授業を受けた 歴史だ 先生が代って山口といふ文学士が来た すぐ「成田屋」といふ綽名を付けて了った 新米の文学士さんなので講義するのが難しいと見えて時々汗を拭って居た 第三限は独逸語

第四限は作文「暑中休暇中のこと」といふ題なので大層骨折つて書き上げた 第五限は国語であった。白山で電車を降りて家へかへり真(ま)に此頃出来た本郷俱樂部の水を浴びるように出来て居る風呂へ行つたが子供が大勢騒いで居るのと梅毒患者らしい奴が入つて居たので早々に逃げて帰つた も一つの風呂には癩病が居たしどうも困つたことになった。帰つてから泰三さんと将棊を差して三度とも敗けた そこえ小包が来たので直に開いて着物を更えた それから新宮へ葉書を出した 夜は頭痛がするので寝た。

九月五日 曇 五時四十五分起床 白山の方へ廻つて電車へ乗つたが満員許りで十五分の待つて居るうちに割引が切れて了つた

第五限ウンケル氏の会話の時に宿題をいひつかつた 帰りは電車が停電したので友達二三人と歩いて帰つたら二時十分であつた 宅へ帰へつたら泰蔵さんが相変らず盛んに歌留多をやつて居た それから夏樹さんの所へ葉書を書いてるうちに泰三氏の友達も帰

へつたので急にひっそりして淋しくなつて来た 龍児とでも遊びたくなつた それから御湯に入つて来た 夜は独逸語の復習して寝た

九月六日 金曜日曇 朝少しく雨降る 六時前起床 此頃やつとどうこうかこーか蚊帳を畳むことが出来るやうになつた 第一限独逸語の時間には不定法といふことを習つた 大分難しかった 直き独文階梯が終るので独文読本を買つた 第五限体操の時ゲートルをはいてなかつて怒られた 家へ帰つたら兄さんは未だ来て居ないし泰三氏も影山氏も学校へ行つて了つたし居るか居ないかわからんような春月氏と留守して居たがだんだん暗くなつて来るし話し相手もなし 誰も帰らんので大層淋しかった そして故郷の楽しいことが思はれて我が心を慰め兼ねた それからうちへ葉書を出した 葉書を出すのが習慣のやふになつて出さぬと物を忘れたやふな気になる

九月七日 雨 六時五分起床 指谷迄出て電車に乗る 七時五拾五分着校した 第壹限国語 第貳限漢文

漢文の本が難しいので骨が折れる 辞書がないので困る 第三限独逸文法の時 *Der bestimmte Artikel*

*und der unbestimmte Artikel* (定冠詞と不定冠詞)といふことを習った 第四限算術 家に帰へってから新宮へ言ひにくかったけど金を送って呉れと手紙を遣った それから風呂呂に入つて来た 夜は泰三氏と将基をさしたり面白い話を聞いたりして十時頃就眠す。

九月八日 雨 七時四十分起床 なぜこう雨がふるんだらう 今日朝からふつて居る 朝飯を終えて泰三氏と将基をさした 馬鹿に強くなったもんだ 又皆敗けた 景山氏はせつせと鉄道の地図を書いて居る 昼からは又将基をさしたり新宮へ葉書を書いたりした 少しく独語をさらった 分らん所があったので春月さんに尋ねて教えてもらった 姉さんの所から葉書がきた 御母さんは十日頃出発だとの「葉書の字が妙につづけてあってよみにくいので景山氏にも読んでもらったがまだわからぬ所がたくさん

ある今度は泰三さんによんでもらうのだ 夜は蚊屋をつらずにねたがちつとも蚊はな(か)った

九月九日 雨 六時半起床 少し寝坊をしたが二三分遅れただけで遅刻とはならなかった 第一限修身の時間には先帝天皇の御話しをもらった 二限算術 三限体操 第四限独逸語の時には試験があったが皆出来た 第五限植物の時間には海藻の漂本を見た 帰宅後兄さんの所へ葉書を出し昨日の日記をつけた 千駄木の友達の所へ遊びに行つて来た 夜は昨文の残りを作つた 明日は清書して明後日は出すのだ そして来週の水曜日にもらつてすぐ新宮へと送るんぢや。

九月拾日 雨 火曜日 六時三十分起床 又寝防をしたが遅刻しなかった 第壹限独逸語 第貳限唱歌の時には大行天皇奉悼歌を習つた 三限漢文 四限地理 五限の体操は補欠で休みになった

帰宅後茅寄と新宮へ手紙を書いた 昼のうち作文を清書して独文読文を第一課やった 夜は泰蔵氏と将

碁をやつて歴史の復習をやつて寝た この日新宮から小包が違った

九月拾壹日 雨 六時半起床

第三限独逸語の時書取りした 昼からの国語の書取りもすっかり出来た 帰宅後新宮からの為替をもらいに行た。皆学校へ行つて了つて一人で留守した 淋しいよりも恐ろしかった 七時頃泰三氏が帰宅したのでたすかつな様な思がした 夜は新宮へ葉書を出して泰三氏と快談してねむつた

九月拾二日 久しぶりにて天日を抑おさふぐを得た 学校は三時間でひけて四時間目には御大喪の時の注意を聞いた 三四五年は奉送に行き一二年は総代を出す 帰途大礼服の名士を沢山見た 参内するのださうだ 二時から神田へ行つて夏樹さんの代数の下と受験界とを買つて来た 久しぶりの晴天なので人が沢山で居た 明日は学校が休みだ

九月拾三日 晴 六時起床

泰三氏と秋江氏の宅へ行つて靴をもつて帰つた そ

れから将碁を戦はした 影山氏は御大喪を奉送の為 九時頃出発 泰三氏は十二時半頃出発 吾輩は奉送せず 昼から夏樹さんの所へ小包を出しそこらへ散歩に出て二時頃帰宅 五時頃から御飯の仕度にかゝる 煮豆を買ひに漬物屋へ行たら亭主がじろく顔を見て居た それから春月さんと御飯を食べべあとしまつをして春月さんの所で独逸語の話など聞いて十時頃就眠 十二時泰三氏影山氏帰宅す

九月拾四日 晴 八時半起床

朝から将碁をして拾時頃泰三氏と御湯へ行く うちから手紙に十一時母上出発とのことなれば兄さんに帰るやうに電報をうつて谷中ヤナカの方で散歩して帰る 帰途乞食俱樂部といふ本を買つて帰る 夕飯は泰三氏が帰らなかつたから春月氏影山氏と三人でそばを食つた

九時頃兄貴かへる 夕飯がすんでなかつたのでそば屋へ行つた 吾輩も御供した 今日馬鹿にそばにえんのある日ぢゃわい

九月拾五日 雨 七時半起床

母上は十六日頃出発とのこと あす洋服が出来て来るはずだがことはってやらうかな 兄貴と将基した兄貴は弱い 御話にならん しかしこれは兄貴にないしよだ 馬鹿に雨がふってしかたのない陰気な日だ 一日遊んで暮した 夜は兄貴の友達が来て居た

九月拾六日 雨 七時起床

寝坊をした 大騒して学校へ行ったが七分程遅刻して居た 第弐限独逸語の時に書取りをやった 皆出来た 第弐限修身の時に先帝陛下の御話しを聞いた 体操第三限は靴ずれがして痛いので休んだ 第四限算術は吾輩が当たったが起きた 植物の時には紅藻類の標本を沢山見せてもらった 帰へってから新宮へ手紙を出して将基まさきをして遊んだ 昨夜影山氏の学校が焼けた

九月拾七日 曇 六時半起床

第二限の唱歌は先帝陛下五十日祭に当るので遠慮して歌はなんだ

第四限地理の時間は和歌山県のことを習った 新宮のこともならった

帰宅後新宮へ手紙を出して兄貴と将基を——独逸語と国語の書取りとを予習した 夜は眠った 影山氏の学校は十月一日迄休みだそうだ 今日春月さんにヒルツ独逸語読本をかしてもらった 駿河台の独逸語の本の商会は九月卅日迄一割五分引きだ それ迄に独逸語の本は買ふて置かふ

九月拾八日 晴 木曜日 六時起床

第一限算術の時試験をやった 出来た 第四限植物第五限会話の時には又宿題をいひつかった。新宮へ手紙を出した 今日乃木大将の葬式で沢山の人が行くので電車は一ぱいだ 夏樹さんの所へ受験界を送らうと思ったが影山氏がよんでいたので送りえなんだ 算術の宿題国語のかきとりを復習して兄貴と将基をやった

九月拾九日 晴 六時起床

第一限図画は自画像をかいた 第二限独文法の時に

は乃木大将の葬式といふ独逸語を習った 第五限体操は靴ずれがまだなおらんで見学した 昨日から歯が痛くてたまらん 帰宅後兄さんと将基<sup>マツキ</sup>をさし受験界をよんだ 五時頃新宮から電報為替を送って下さった それから新宮へ葉書を出した 夜は独逸語を少しく習って歯が痛いからすぐねた

九月廿日 晴 六時起床

馬鹿に歯が痛い 学校は四時間で帰へってきた 第一限独逸語と国語の書取りをもらった 帰宅後金を受取ってきて薬を買ってはにつけた 少しはよくなったがまだいたい 夜は根津権現の祭りへ行ったがなかなかにぎやかであった 非常に寒くなって単衣では困る 早く衾をほしい 母上一行は二三日のうちに御上京のことと楽しんで待つて居る 夜もはが大層痛かった。

御気嫌<sup>(感)</sup>如何です 私(感)は歯痛で困つて居ます

母上御一行は出発になりましたか

東京は寒くて夜等は皆羽織をきて居ます

私も暖いなりをしたいと思ひます

冬樹智恵子はどうして居ますか

今日は雨がふつて少しく暖くあります

廿二日午前十時半

愚弟拜

姉上様

兄キの習字

一枚封入

夏期休暇中のことを記す

九月四日 一甲 佐藤秋雄

○月○日空痛く曇り浪荒し船は長き汽笛の余韻を振はせて三輪崎港に入る。四月上京したる時とは港内の様痛く趣を異にせり。我を送ると見えし鈴島の松も今は我をさし招き高き浪の響も我を迎ふるに似たり。

上京<sup>(感)</sup>し直に車を走らせて新宮の町へと急ぐ。その間一里余、車夫は犬の力を借りて或は急阪を登り

危道を走る。車上遠く懐しき故郷の町を望めば心は早くも父母の膝下に飛び去る。漸くにして町に入る。幾多の町を過ぎ母校の前を通りて、我家の門の潜りしは午前九時半なり。直に懐しき父母慕はしき兄上に謁す。情ある父母の御言葉兄上の言一として楽しからざるはなし。我が愛する庭に出れば艶なる芙蓉優しき萩など皆我れの帰郷を喜ぶが如し。幼き甥に都にて買ひ求めたる玩具を与へなどして喜ぶ状を見るも亦樂し。

夜は一家月光の下にまどゐして都の話し故郷の談に夜を更かしぬ。

楽しきまどゐかな、あゝ都の空にてこの楽しきを夢めみしこと幾度なりしぞ。（終）

東京日記

九月廿一日 曇 土曜日 第二限漢文 第三限独文法

の時には独逸の面白い話を聞いた。私も早く先生のようにこの様な面白い話を独逸語でよめるようになりたい

第四限算術の時近いうちに試験をやるといった

帰宅後今日できて来たづぼんをはいて見た。恰度よい。兄貴は友達のうちへ行た。影山氏と遊んだ。夜は根津権現の祭に行つた。然し新宮のまつり程賑でない。兄貴八時前帰宅。それから将碁をしたりして九時頃就眠。

九月廿二日 雨 午前九時半起床

夏樹さんの所へ受験界を送つたり日記を送つたりした。日記と同封に兄貴の習字一枚をも送る。午後より散髪して風呂に入つて来た。非常にいい気もちになった。それから平井の所に葉書を出して置いて一寸算術の本をのぞいて見た。夜は泰三氏と将碁をた、かはしたり新聞の懸賞を書いたりして夜を更かした。今日は兄貴ときんつかみをやった。なかなか壮烈な武士道的遊戯だ。

九月廿三日 雨 午後より晴 七時半起床 秋季皇霊祭

朝方三時頃よりの大暴風雨密に松山の柿を思はしめた。九時頃から泰三氏と本郷簡易図書館へ行つたが

休みであつたから三丁目の方へ行つて雑誌を買つて帰つたが風が馬鹿に強くて車が転ぶやら戸が飛ぶやら大さはぎだつた 帰宅後兄貴と将棊をさしたりした みるからは泰三氏と遊びに行くはずだつたが止した 兄貴と遊んだ それから百六十万坪は何十町四方になるかといふことを研究しそれから一平方里と一里平方とは同じか違ふかといふことについて影山氏と大議論をはじめて氏は違ふといひ私と兄貴とは同じだといつて約一時間の間論を戦はして我々の説の方が正しいことになつたが景山氏にも大に学ぶべき点はある それは過を改むるに敏なることだ さすが論語の愛読者だけに偉と兄貴と感心した 夜は兄貴は向陵館かどこかへ行き吾輩は明日の独逸語試験の準備をして九時頃就眠 寒いこと夥し

九月廿四日 晴 三時頃しゆ。ふ。雨あり 火曜日

六時前起床 直に学校へと急ぐ 電車のコむこと 甚し 校庭の松樹の二三本たほれたり 友と隣をい。て。ふ。の。み。を。落。し。て。叱。ら。る 第一限独逸語の試験は

明日にのぶ 本日より喪章を附するに及ばざる旨掲示されたり 第四限地理の時に教師より質問されて大に狼狽す 先づ一通りはうまくごま化したり 帰宅後姉上夏樹様の手紙拜見 兄貴の所へは長島豊太郎氏藤沢清造氏見ゆ 夕方兄貴と棊を戦す 夜は算術独語の復習に珍らしく夜を更かす 十時就眠

九月廿五日 曇 五時半起床

歴史の時干将莫耶の劍の話しをしてもらつた 国語の時書取りをやつた 帰宅後兄貴と将棊をさし会話を書いた 二枚かくのに一時間半も要した 母上等はもう御出発になつただらうか

九月廿六日 雨 六時起床

第一限算術の時間に試験をやつた 先づ皆出来た 第二限地理の時質問をされて一寸間誤ついた 帰つ〔て〕からこの時〔の〕ことを兄貴にいふと怒られた 第五限会話の時には書取りを十点もらつた 独文法の時幽霊船といふ面白い話しをしてもらつた 帰宅後兄貴とけんかした 兄貴は叱り手がないので馬鹿



にいはって居る それからヒルツの独語読本の絵を見た 夜は漢文と地理をさらったが漢文の字引きがないので実に困る 早くほしいものだ 今夜は夕月が馬鹿によかった 根津権現の森から真赤な色をして樹の枝の間を出て来たなどは実によかった 新宮も城山の月がさぞよいことだらう 兄貴の所へは広川氏が来て居る。

東京日記(第三回)

九月二十七日 金曜日 六時前起床 晴

第壹限独語の時教師が生徒の志望を尋ねたら医者になるものが四十三人の内で廿人近く居た 弁護士になるものも少しは居た 金をもうけようとするものも二三人は居た 兎角医者になるのも法律家になるのも皆金もうけのためだ 即ち金もうけるものが一番多いわけだ 第四限算術の時には整数の性質といふことを習った。事、数理にわたって居るので、（少し）難かしかつたが直ぐわかつた 帰宅後風呂に入った

なにしろ一週間ぶりだから頗る垢があつたが亦それだけいゝ気もちだ それから本郷三丁目の方へ散歩した 新入の大学生や高等学校の生徒がずいぶんたくさん居た 夜は兄貴が留守なので勉強を休んで早く寝たら思いの外早くかへって来てさんざん叱られた 実に非道い目にあつたわい。

九月廿八日 晴 六時起床 土曜日

第三限独文法の時相変らず面白い話を聞いた

近頃虎レラが流行して居るが用心せんととつつかれると大変だ 帰宅後兄貴は昨夜夜店から買求めた石を弄んで居たがそれを入れる硝子の鉢を買いに行くと命ぜられて本郷三町目（に）出て見たがよいのはなかつた 後で兄貴も藤沢と一しよに行たが矢張買つて来なんだ 馬鹿に寒い 袷でも着たい位だ 今日 は平井と品川へはぜつりに行くはづだったが矢張虎レラが恐しいので止した 夜は影山氏に将棊ばんをひくのを手伝ってもらつてそれから兄貴とやった 兄貴の方が少しく角一枚位強いのでいつもまける そ

のたびごとに自慢する ああゆうことでは弟の教育  
ができんといつてやった

九月二拾九日 日曜日 曇

朝疾くから秋江氏の所へ行き冬服の上衣及マントを  
もらつてかへつた 行きだけ歩いて行つたら凡一時  
間程かゝつた 帰つてから掃除をしたり将基をした  
りするうちに昼となつた

午後風呂に入つて来た 一時頃阪野さんが訪ねてき  
て来れた 阪野さんの友達が二三人居たので上らな  
んだ 亦来ると言つて帰へつた 夕方姉さんの所か  
ら葉書が来て母上も明日位着かれるだらふとのこと  
であつた 夜七時頃京都からの母上の電報が来た。

九月卅日 雨 月曜日 寒さ強し

第壹限修身の時には先帝陛下御聖徳の話を承つた  
面白かつた 第三限体操の時に服装検査をやつたが  
まづ無難合格だつた 昨日ゲートルを秋江の所から  
持つて来てよかつた 第五限植物の時間には面白き  
植物の話をして山きいた 帰宅後冬服の被れを修繕し

た所へ兄貴が帰つた そして母上等の居る所へ行つ  
たら竜児は叔母さんにおはれて御母様は洋傘などを  
持つて貸家とかいたうちの前へ立つて居られた そ  
れからその家をかりようかと言つたが家賃も高いし  
敷金も高かつたからよした それで母上らは近くの  
向陵館へ一先づ落ついた 夜は向陵館へ行つて松山  
のかきを沢山喰べた 中々甘かつた 父上の得意思  
ふべしだ

拾月一日 曇 六時起床

第壹限読書の時独語の書き取りをやつた 一ヶ所間  
誤⑧つた 惜しいことをした 唱歌の時間には難しい  
唱歌の規則記号などを習つた これがすんだら独逸  
の国歌を教へるといつた 第三限漢文の時には辞書  
の話しをきいた

帰宅後向陵館へ行つたが留守なので習字をかいた  
夜は母上の所から迎へが来て行つて来た

【\*右欄外】これは宿がえのさきぎに二日三日四日の原  
稿を失つて後にかいたものですから少し位は違てる

かもしれません。

拾月弐日 雨 六時半起床 水曜

第壹限画の時には自画像をかいた 歴史の時に質問されたが大丈夫答が出来た 誤解の時間は教婦（師）が休んで他の話をきいた 帰宅後頭痛甚だしく就眠をした 此頃兄貴は金五十円程もらっている 本をかはねばならんと口癖のように云ふてゐる。

十月三日 雨 六時起床

朝速く叔母が龍児を迎へに来て向陵館へ行った それから兄貴等と皆で牛込の昨日かりた家へ行つて見た 二階八畳 下八、六、三畳で台所もそうせまくない

瓦斯、水道、電気がついてある、二階は眺望よくて九段の方まで一目に見える 家賃十三円 叔母様は家賃が気に入つたらしい 電車道も二町位、私の学校へは卅分内外で行ける。

それから直に秋江の所から荷物を取り出したり長江の所から蒲団をもって来たりして夕刻に片附いた

夜は兄貴と洋燈を買いに行つた

拾月四日 晴たり曇つたりむし暑し

第二限国語の時には試験をやるといつた 三限習字の時教師にほめられた（褒）。算術は益々数理がむつかしくなってくるが教師の教授法が巧なのかずんずん頭に入つて行く

帰宅後兄貴と長火鉢を見に行つたがあまりよいのはなかった 龍児と遊んだ 龍（児）は大層元気で新宮よりはよいと言つて遊んで居る

#### 東京日記

拾月五日 晴 暑さ厳し。土曜日 朝夕は寒し

第四限算術の時に最小公倍数の求め方を習つた 第三限独文法の時には珍らしく先生が怒つた 尤も俺が叱られたのではない。

今日は明大対早大の野球の試合を見にゆくはずだったが暑くて止した 早大の方が大敗北をしたさうだ。母上等は青山の葬場殿拝観に行たので兄貴と留守居

した 昨夜兄貴の買ふて来た侠客伝を読んだ

拾月六日 晴 暑し 日曜日 朝夕は寒し

七時半頃起きた 麗な朝日がさす二階の縁へ出て九

段の方迄一目に見る よい気持とは実に予想意外だ

拾時頃母上等浅草の藤井明義氏の家を訪れる 留守

居して二階で本を読んだ こんな天気の良い日曜を

家の中で暮すのは少し惜しい 母四時頃帰宅す 冬

樹は刀と鉄砲と積木とを買ふてもらつて大喜びだ

今日冬樹電車の中で皇后様は天皇様の奥様か伯母様

かと尋ねて電車に乗る人に笑れたそうだ 九時

頃就眠

拾月七日 晴

第壹限修身の時間乃木大将誠忠の話しを聞く

第貳限算術の時間最小公倍数の計算問題数十をやる

第四限 訳解の時書取りの答案を帰して<sup>(返)</sup>もらふ 満

点なり 満点のもの多し 植物教師に悪戯をして叱

られぬ 帰宅後昨夜書いた手紙を出し友人高橋の家

に訪問し行く 友は図画をかき居れり

夜は母上等神楽阪に買ひものに行く 今度の家神楽

坂に近し 一町あるかなきかの程なり 土産の菓子

喰べて拾時過ぎ就床。

拾月八日 曇 火曜日 六時半起床

第一限訳解の時に書取り及び試験あり 書取りは一

所誤つたが試験は誤なし 唱歌難しき独逸国歌を習

ふ

帰宅したれど皆留守にて家明かずしめ出されたり

頻に大便を催して大に弱る 待つこと約一時間にて

皆帰る 母今夜六時の汽車にて北井太七氏と北海の

旅に行く 夕刻より書店に行き和独辞書を買ふ 母

上の賜にて金文字皮表紙の書一つふえたり 夜は書

齋なる階下の八畳を掃除し父上の許に手紙を出し書

を読むこと一時間にして寝に就く 九時近くなり

拾月九日 午後雨 午前曇 六時起床 水曜日

第壹限図画の時絵具を忘れて手帳へつけられた

歴史の時に日露戦争の話を聞いた 中々面白かつた

作文の時「我学校」といふ題が出た 土曜日迄の宿題

だ 国語の時書き取りをして六十一問題の中三問題  
間違つた

一時半帰宅 雨具の用意がなかったから友達の家で  
借りて来て漸くぬれずにすんだ 漢和大辞林を買ひ  
来る 雨強き為叔母龍児つれての立石行きは止した  
チヨウをきりにゆくのだ

冬樹大に喜ぶ

冬樹と遊んで三時半頃からウンケル氏の宿題を片  
けで了ふ 夜は作文を作り漢文を読んで九時就眠

拾月拾日 曇 六時起床

第四限独逸文法には一寸と試験みたいなことをやつ  
た 然し私はあたらなんだ

五限ウンケルの会話複雑なる文法を習ふ 分り難く  
かつた

今日学校の裏の墓地より地藏様を盗み来りて学校の  
便所へ投げこんだ奴がある 注意人物は留め置きを  
食つた

帰宅後叔母竜児立石へ行く 一人留守居して習字を  
かく 兄貴三時頃帰る 叔母四時頃帰宅

夜は和歌山の竹田及び新宮の友人二三人の所に葉書  
をかき算術の宿題及び植物の暗記をやつて十時近く  
就眠

拾月十一日 晴 寒さ強し

第貳限国語二の読本を習つた 算術分数を習つた

帰宅後近所の友達と高橋の家へ行って遊んで来た

夜靴をもらいに行つたがまだ出来てないのでケンカ  
して戻つて来た 八時半過ぎ迄勉強して寝た上蒲団

二枚かけねば寒い 御母様から到着の電報来た 北

海道は撫撫ぞ寒いことだらふ。

拾月十二日 晴 昨夜来の雨晴れ実によい心地なり

独逸文法の時にアラビアの面白い話を聞いた。学校  
がひけてから丙組の生徒と野球の試合をした 九対

六で勝利を得た それから平井の所へ行つて銀座の  
方を見て歩き平井の家で学校の用事をしてすまして  
かへつたら八時近くになつて居た 叔母様に御心配

をかけてすまなんだ

拾月十三日 晴 日曜日

朝の家は龍児と遊で昼から上野の拓植博覧会を見に行つた 実に大変な人だ 電車が五六台も続いている 皆満員一杯だ

入場料は平生の倍額甘銭だが人は一杯で切符をかうことも出来ん 四十分程して漸く買ひ得て入つた人が見えるばかりでなにも見えぬ 漸く割りこんで前の方へ出て見た 先づ樺太の陳列処で初は犬櫛の景色 それから台湾の室へ入つて農産としては豆類甘庶<sup>(豆)</sup>パイナップル龍眼肉などを仔細に見た 何れもよく出来て居て豆等は内地のより余程大粒だ 二間もあるやうな甘庶<sup>(豆)</sup>も見た 阿里山の檜は有繫に大きなもので畳二畳敷位の檜一枚板などは実に立派なものだ それで作つた書棚やなにかもよいのが沢山ある 台湾の動物としては大蛇の酒精づけ石豹<sup>(ヒョウ)</sup>山猫とかわんぷくろなど色々見たが何十もあるのは到底かききれん 次の樺太北海道の室の中央には樺太の

景色として皆実物を用いて(但し動物はハクセイ)実際のように作てある 馴鹿白ふくろなどは一寸注意をひいた 海産物の鰺鱈、鮭等の酒精づけ(?)もよく見て置いた その他石炭農産物とかも見た

次の内地の室、(福岡、九谷などのものを陳列した所)はよく見ずにすぐ中庭に行つてアイヌを見た 男はアイヌ細工を売つて居た 次には樺太のオロツコ族かコロポックルかよく覚えぬが見た 呑気にい。ろ。りにあたり茶をのんで居た 台湾の生蕃も見た イレズミした強いかほの赤い布切をひつつけた 竹細工をして居た男がウライ社かなんとかの頭目だ そうだ 子供は可愛いかほして居た 次の室の関東州朝鮮の所では朝鮮の人参豆や関東州の旅順附近でとれたラッコなどを見た 又関東州満州に輸入する各国の陶器で日本品の模造が沢山あつた 中々うまくつくつてあつた 朝鮮の虎なども見た うまくは。く。せ。い。にしてあつた

帰途神楽坂の魚屋(二三丁近々)にコレ。ラ。が出来た

実に物騒きはまる話だ。

拾月拾四日晴 月曜日 六時半起床

学校には変はったことなし

帰宅後神楽阪へ本を見に行き靴墨を買ふて帰る

夜は叔母龍児神楽坂に遊びに行く 独語を復習して

八時半頃就眠 兄貴の所へ友達来る

拾月拾五日 六時半起床

第二限唱歌は教師東儀氏西京へ行かれた為体操をや

る おかげで四時間 十二時に退けた 道で矢野と

水を飲む 湯に行き神楽阪に出で、瓦斯マントルを

買ふて帰る

今日学校からの帰途独逸人の教師(上級の)とつれて

帰る 独語にて会話を試みる 少しは日本語も入る

るので、多少はわかる 「今日は好い天気ですね」と

独逸語で(Es ist heute schönes Wetter)といったら大

層ほめてくれた 江戸川で左様なら(Tschüss)と云っ

てわかれた 夜は八時頃就眠。

拾月拾六日 晴

第壹限図画の時に教師がつまらんことからさんざん

にひやかしたのでけんかしてやった

第二限歴史 日露戦争の話のつゞきを聞いた 面白

かった

四限作文の時原稿を清書して出した

帰宅後独楽を買ふてきて冬樹とまわした

夜は叔母さんと冬樹と神楽坂に行く

兄貴の所には長島豊太郎氏来る

独語の単語三つを覚えてそれから平井の所に葉書を

出して九時就眠。

拾月拾七日 祭日

午前中神楽阪へ遊びに行たり風呂へ入ったりした

冬樹と二階で遊んだ 阪野さんの所へ行つたが留守

であえなんだ

午後は文部省の展覧会を見に上野に行く

拓植<sup>(植)</sup>博覧会へ行く人<sup>(人)</sup>ととで上野は人で真黒だ

入場料十銭を払つて入った 第壹室から第二室(?)

迄は日本画だ 新派と旧派とを別にしてある 矢張

り旧派の方がよいわい。あまり沢山あって初めのうちは熱心に見て居たが厭になつてきてよく気をつけて見なかつたが中々面白いと思つたものが沢山あつたので題などはよく覚えて居ない

彫刻の室もよく見たがわからふ筈はない

西洋画は大分注意して見た 水彩画はあまりなかつた様だ 油絵とパステル画(?)などが多かつた 春太平洋画会に出た絵も大分あつた様だつた。

帰宅後雑誌を読んだ。夜は、独語と算術を復習予習して九時半頃就眠

拾月十八日 曇 午前中暑さすこしくきびし

第壹限独語の時強変化弱変化などと文法のことを習つた

第五限体操の時に高飛をして足の膝関節(⑧)の側のはれたところが痛くなつて弱つた

帰宅したら母上が帰へつて居た それからすぐ新宮へ電報を打つて置いた 北海土産の林檎を喰べて甘味しかつた

それから火鉢を買いに行つて来た

夜は算術の復習に忙はし 九時半頃就眠

拾月十九日 土曜日 晴

第壹限国語の書取りをした 皆出来た

第三限独文法の時亜ラビアの伝説をきいた 大層面白

白

帰宅後高橋の家へ行って来て家で留守番をした 夜は新宮の友達の所へ葉書を出して九時就眠

拾月廿日 晴

朝風呂へ行って来た 皆も三越へ行つたし兄貴は長江氏の家へ行って皆留守になつたので私も友達と初めて浅草見物に入つて活動写真を見て帰つた 大変なにぎはいだつた 五時頃帰宅 独語復習の後昨夜古本屋で求めた独逸文典詳解といふ本をよんだ 中々難しい。

拾月廿一日 晴

第壹限修身の時間には乃木將軍の話をきかされた 第貳限には算術のしけんがあつたが無事大慨(⑧)できた



第五限植物の時に支那の貨幣の話を書いた 大層面白かった

今日は兄貴が風邪でねて居るし皆は長江氏の所へ行たから友達とうちで遊んで五時頃友は帰宅した

兄貴の所へ友達がきて御飯を出したりするので大騒ぎした

夜は神楽阪の縁日へ遊びに行た 九時就眠。

拾月廿二日 晴

今日は学校の創立記念日で休みだ 朝十時頃風呂に行きそれから友達二三人と昼まで野球の稽古をした

ひるからは外山ヶ原へ野球をしに行た 一年級甲と丙とがやった 七対六で辛くも勝利をえた 四時帰宅し、づがをかいた 夜は六時頃に高橋がよびにきていやだった遊びに行て八時帰宅す。

拾月廿三日 晴

第壹限図画の時村の写生をやった

第貳限歴史の時には来週しけんをやると言ふた

第五限国語の時には遠足の話をしてもらふた

帰つたら御母様は出発されて居た 近所の広場で友達二三人と野球のまねをした

夜は漢文の復習予習をして独逸文法詳解をよんで九時就眠

拾月式拾四日 曇り

第壹限は地理の教師が今日京都の方へ五年級生徒と修学旅行に出たので九時から始まる

算術は分数にうつつた 宿題四ツを申しつかった

第五限ユンケル氏の時にも宿題を申しつかった こんなに仕事が多くては始末に終（息）えん 一寸も遊ぶひまがない

帰宅後算術の宿題を終えて習字をかいて居る所へ友達がきて到々夜の七時頃御こしをすえられて弱った 冬樹も御母様がないので淋みしそうだ

暮口を冬樹にしまはれて寒いのに神楽阪迄行つて修繕してもらいにいった

十月廿五日 雨

雨がふつて寒いこと甚しい

第一限独語の時には教師が一銭のノールを出してかきとりをやったがだれもとりに得なんだ

五限体操はくり。上げになりそうだったがならんだ。帰途神楽阪へ行つて墓口の修繕をもらつてかへる。それからづがをかいて夜は冬樹と遊ぶ

拾月廿六日 晴 土曜日

第壹限国語の時通信簿を戻してもらふ

第二限漢文は教師が修学旅行について行たので独逸語の教師がきて話しをして呉れた

第三限独文法の時試験をした 一つ誤つた

帰宅後高橋と留守番して高橋は参時頃に帰つた

飛行船を見た 九段の方からうちの屋根の上を通りて過ぎて行つた。これがこの頃新聞などでかきたてるやつなのだ

夜は近所の文房具屋へ原稿用紙を買に行て来た

それから雑誌を少し読んで寝た 八時半すぎなり。

拾月廿七日 曇り 日曜日

朝早く飛行機が飛んださうだが八時すぎ迄寝たので

よう見なんだ 起きてすぐ俵を燃やして藁ばいを作つた。

それから風呂呂に行て来て、兄貴の用事に行く

冬樹は頭を坊主にそつて喜んで居る

午後は今村と早大の運動場へ早大対横浜商業の野球試合を見に行く 横商の方は十八九の少年ばかりだ。それで早大一流の選手と戦ふのだから見物人は皆その勝負をあやぶんで居る 二時から始まる 第一回には早大一点を得る

横商はいらず二回早大また一点を得横商入らず

四回の表に早大又一点を得かくて六回の裏まで早大三対横商スコンクだったがそれから続々と入つて九回の裏に至つて四対三で横商の勝利となつた。帰つたら六時半 夜は算術の宿題をやる 冬樹は叔母様と神楽阪へ。

拾月廿八日 月曜日 曇り

修身の先生が留守で九時始業

三限体操も先生がないので独語の先生がかはりにき

た

帰宅後高橋と今村がよびに来たので高橋の家で遊び  
五時半頃帰宅した 明日は遠足なので早くから眠る

拾月廿九日 曇時々時雨あり

三時起床。六時迄に浅草駅へ行かねばならないので大  
急ぎで仕度して四時出発して伝通院前から五時十分  
にのって四十分頃ついた それより六時拾五分の臨  
時列車にのって九時半大田駅（群馬県にて朽木県足  
利の近く）についてそれから長い町をすぎて新田義貞  
の菩提所新田寺（大光院）に詣でた ここは徳川家康  
が先祖の義貞をまつた所で浄土宗の寺で吞龍様と  
もいふ 堂広く庭には松が多くて庭の眺も頗るよい  
こゝで茶をのんでそれから義貞の遺骨を葬った金龍  
寺に行き又義貞の墓に参つて、金山城跡をすぎ新田  
山の松の間を分けて新田神社に参拝する ここは海  
抜八百尺の新田山の頂上で眺望が甚だ宜しく右手に  
は秩父山脈の山々を望み他は広漠たる関東平野で黄  
色くみのった稲の波打つ所に点々と人家あり森林

あり又渡良瀬川の長蛇の如きあつて実によい景色だ

新田神社は明治六年の創建で別格官幣大社だ 新田  
義貞のかむったかぶとや軍旗などを見せてもらった  
こゝの茶店で弁当を食つた それから一時間半位遊  
んで麓の高山神社（高山彦九郎を祭る）に参拝して一  
時間ほど休んだ この辺は松山ばかりで松茸の名物  
がある しかしこの辺の山は皆宮内省御料林だ 三  
時半の汽車にのって帰宅したら七時すぎだった そ  
れから電車で帰宅したら八時すぎであった 実に今  
日は面白かつた

十月卅日 曇

昨日の疲で思はずね防して九時起床  
漸ばつに行き風呂に入ったら十二時  
午後は郵便局へ金をもらいに行て来た 冬樹と叔母  
様は買物に行て独り留守番 戸をしめきつて寝てし  
まつてようやく五時頃に目をさます 夜は独語の復  
習して十時就眠。

サトウフユキ

オトウサマゴキゲンオヨロシイカ

ナツキサマゴキゲンヨロシイカ

オカアサマヤスコサマ

チエコミナゴキゲンヨロシイカ

サトウフユキ

東京日記

十月卅一日 雨

第五限会話の時ユンケル氏が大層御氣嫌斜め(意)で恐しかった 帰途雨具の用意がなかつてびしよぬれになつた

父上の所へ手紙をかいて居る所へ手紙が来た 冬樹は大喜びであけたが自分の所へはないので失望して居た

夕方御父様の所へ手紙をかいて呉れといふたのでかいてやったら佐藤冬樹とかなでかいて一しよに入れて呉れもつてきた

十一月一日 金曜日

第一限訳解 第二限国語の時書取りした

帰宅後平井と共に神楽阪迄行つて逸語(意)の本をかつた

雨具の用意がなかつてびしよぬれになつた

歴史を復習して夕方となる 冬樹と遊び夜は亦歴史の復習す 来週の水曜にはしけんあり。

十一月二日 午前中曇時々秋雨あり 午後晴

放課後直ちに早大の運動場に至る 今日朝鮮の野球団と試合あるなり 二時半頃始まる 朝鮮方弱きこと甚し 九回迄朝鮮団は零なるに早大方は廿三点を得る 到底敵すべからず 夜に至りて友と汁粉を食ひてて帰る 帰れば父上よりの手紙あり 共に明治天皇の本あり 今日より読むもの又出来たりと喜ぶ 早速返事を出さんと思へる時高橋来りて神楽阪の縁日に遊びてそれより高橋の宅に到て十時頃遅くなりて帰る 十二時迄恵送の天皇陛下の本をよみ今更ながら感心す

東京日誌

拾一月参日 明治節

これまでなら天長節で実に目出度い日だが今年からはもうそうぢやないと思ふと又悲が深くなるようだ  
叔母様と冬〔樹〕とは芝公園へ乃木大将の追悼式へ行く  
私は朝のうちには友達と遊び午後からは高橋や今村と甲武鉄道で府下の大寄といふ所へ遊びに行つた  
一向つまらん所であつた 往復汽車賃十五銭すてた  
ようなものだ

それから日本橋の大倉書店へ独逸語の本をかいに行つたが今日は休業だったので銀座の方へ行きそれから平井のうちへ（京橋）一寸よつたが留守らしいので帰つた 六時帰宅  
夜は押入れの中へ寝たが中々面白いし温い。日記をつけるのを忘れて又起きて記す

拾一月四日

学校には変つたことなし  
帰途直に日本橋の大倉書店に至り独逸語新読本を買

い来る 非常に難しき本で一寸読めさうもなし

帰宅後冬樹と遊ぶ 兄貴の所へは誰か友達来れり

拾一月五日 雨すこしふる

第二限唱歌の時点数を取つた

第五限体操の時復式呼吸なるものをさゝれた

帰宅後明日の歴史の試験をさらふ 冬樹と叔母様とは西の市に行た 三時間歴史を復習して又画をかく  
夜は直に寝につく

拾一月六日 雨

第一限図画の時に巧いとほめられた

第二限歴史のしけんには皆やさしくて出来たが推古天皇時代の外交につき知るところを記せといふは少しく骨折れた

帰宅後冬樹は九段へ行かふと言ふて居るが雨がふるのでやめさした 洋服をきて「兵隊さんぢや劔はどっちへさすのか」と狭い庭で大きな声を出して叫びまわつて居る

小包がついてあつた 丹然（電）と入つてあつた 冬樹は

「みかんかと思た」と失望して居る

会話の宿題をかき終つてから風呂に行く　夜は算術を復習して眠る

昨日小包とどきました

コートのもの（二つとも）も確に有難く頂戴仕りました

今日は招魂祭で冬樹は見に行つて私は留守して居ます

今みかんの函も到着致しました　冬樹がまちかねの品です

叔母様と冬樹は十二日の大観艦式を見物に行くと楽しんで居ます　叔母様は「一円五十銭ほどいるけど一生にみえるかみえんかわからんで」と言つて居ます新しくできる幼稚えんは幼稚園を止めるとかいふて居ます

冬樹は毎日叔母様に甘えて居ます　そして江戸川へ行こう行こうと言ふてつれて行つてみかんや柿をか

はして帰ります

叔母様とこれには少々閉口して居ます

昨夜も一昨夜も寐小便をしたのでうちの書生みたいになつて行くと言はれて居ます

私の旅行の作文は学校では弟に知らせる文として皆で作らせて居ますがこれも送りますし又自分でも大分つくりかけがあるのでそのうち送ります

御恵送の一円は直に独逸語の読本をかいました  
大分本も出きました

十一月七日午後三時半

父上様

秋雄拜

【欄外】明治天皇の本有難くよみ終わりました　面白く

思ました

冬樹も毎日糸を見て居ます

十一月七日 晴

学校には変りなし

帰宅すれば皆留守なり 戸をあけて中に入る

蜜柑の函来る 父上の所に手紙を書き終りし頃皆帰

る 九段に行きこと

冬樹は長家(母)の子供等と遊べり

父上の所より手紙来る

インク壺をかいて来り独語漢文の復予習をなし八時眠る

拾一月八日

第一限独語の時、鳥の名指(母)を尋ねらる 知れるもの

一人もなし わりあい知らぬものなり

帰途本校生徒の柔道二段の人と一段のやつと新宮の

浜剛三郎などがごろつきをこらしめると騒いで居る

のを見に行つたがけんかしさうにもなし。くづ山に

て待てども一向来ず 故に野球をなす 五時頃帰宅

す

夜は国語をよむ 兄貴の所へは藤沢来る

拾一月九日 時雨

帰宅後今村と日比谷に至る 本日は本校生徒と日本

中学生徒と野球をしたのを見に行つた

二回達は両方とも二対二であつたが三回目からは日

本方ががど(父)んどんはいるのにこちらはちつとも入ら

ず逐(母)に七対二で大敗をした 四時半頃帰る

夜は寒気がしたので六時半に眠る

拾壹月拾日 日曜日 晴

珍らしいよい天気だ 朝風呂に浴してきびもちの善

哉に舌鼓を打ち五杯を食ふ。寒さ烈しければ足袋を

買ひ来る

午後は叔母様冬樹様は日比谷に至る。兄貴留守番な

り

私の所へは友人来り高橋のうちに到る 少しく遊び

てそれより学校に至りて撃劔の大会を見るに時遅く

して将に終らんとす 而して数番より多く見る能は

ず

早大生、帝大生、明大生、来賓、本校生、などの試

合を見る 本校生は既<sup>（鹿）</sup>して強し 早大生かに大層強  
い人居たり 又二刀流の人も見き 中々壮烈なるも  
のなり 柔道もよけれど撃劔又悪しからずなど思ふ  
日頃やかましやでおどけやの体操の先生が厳然とし  
て賞品を渡し居たるも面白かりき それより、キャッ  
チボールをなし五時前帰る

夜は叔母上冬樹様神楽阪の縁<sup>（本）</sup>日に行く 私は勉強し  
て九時近く就眠す

拾一月拾一日 月曜日

第五限植物の時この次試験をやると言ふた

帰途直に本郷南江堂書店に行きベルリッツ読本巻二  
（二年用）及びヒルツ読本第一巻の二冊をかい来たる

帰宅すれば新宮より乾物着物などの小包到着せり

それよりベルリッツ読本を読む 割合にやさしき本  
なり

植物の復習をなす

叔母と冬樹とは明日の観艦式に行くので早くねて居  
る 八时就眠

拾一月拾二日

五時頃から叔母様は大騒ぎして居る 五時半出発し  
た 六時起床して友達を誘ふて登校す

第一限独語のかき取りあり 第五限体操 くづ山に  
至りて一時間遊ぶ カン文の時先生病氣にて欠席し  
修身の教〔師〕来る 帰宅後一人留守番する 三時頃  
兄貴帰る

会話の宿題を終えてそばを注文し来る 七時頃叔母  
様帰る

夜は十字頃迄ヒルツ読本の訳をつける 大分出きた  
が頗る難しい 十時頃立石の誰かが来て居た

拾一月拾参日

第一限図画の時に郊外に出て写生をして来た

来週の土曜日頃鬼子母神（雑子<sup>（子）</sup>谷<sup>（ガヤ）</sup>）の秋色を写生に行  
くそうだ 第二限歴史の時この前のしけんの点をい  
ふてもらった 吾輩は満点であった 一番七番九番

のやつも10点だった

第三限作文なし 教師来らず



帰宅後図画をかく 新宮のみかんも味大層よろしく  
皆よろこびたべる 夜は兄貴の所へ藤沢来る  
国語のかきとりをさらいて九時就眠

拾一月十四日 寒さ烈し

学校には変りなし

帰途くづ山に遊びて野球をなし四時頃帰る 夜は高  
橋誘ひに來りて高橋のうちに至り歴史の試験のこと  
など教へてやる この為日記を送るを得ず 夕飯の  
時今日うちよりつきた【\*以下欠】

手紙

日記昨日送るべき所友達が來て送り得ませんでした  
蜜柑ひもの(二包み)かつぶし、わたいれ、其他丹然<sup>(前)</sup>  
など頂戴致しました。兄様前に八円七十銭の本昨日  
卅五円の本買ふて來ました  
叔母様は手がひびきれたがきのう迄辛抱しました、  
があまりたまらんので今リスリンと酒精と七十瓦位  
買ふてきたら十五銭もしたとびつくりしてます 今

度なにか御送り下さる時リスリンか又はわれる心配  
がありましたらワセリンでもよろしう御座いますか  
ら御送り下さいませ

こんど出きたところはやっぱり幼稚園でありました  
一昨日頃から皆行つて遊んで居ます しかし冬樹は  
まだいやがって行きません 冬樹は御父さんを見た  
いと申して居ます そして毎日御飯たべて居るとき  
でも薬局や診察局の夢をみるさうです

私の作文はまだ皆出きませんし学校での作文もまだ  
先生が休んだので出来ませんから三四日のうちには  
私のたけでも送るようになります 今の頃は臨時し  
けんで忙はしくあります、夏樹様もさぞかし忙しき  
ことと存じて居ます

智恵子もどうして遊んで居ますか。

只今のうちの模様は私が八畳の中央に机をすえて明  
るい瓦斯の下でこれをかいて居ます 叔母様は机の  
そばの火鉢に手を置いて冬樹と遊んで居ます 冬樹

は軍人の絵本を見て叔母様に教へてもらつた説明を空よみして「キヘイガテキチニセッコニーユキマス」

「十一月三日天皇陛下は東京青山に於てかん兵

【\*以下欠。この手紙は綴じられておらず、バラで日記と一緒に保管されていた。】

#### 東京日誌

拾壹月拾五日 晴 夜に至りて時雨あり

第壹限独語の時独逸のおとき話しをきく 面白し

帰宅後父上の所へ手紙をかく 平々凡々に日を送る

拾壹月拾六日 晴

第三限独逸文法の時先生は川越の大演習に行つて留

守なので漢文の教師が代理にきた

放課後平井と外山原へ行つた 今日平井の方の新

しい野球の倶ラ部と早稲田実業と試合をやるのださ

うだ

初めて郊外に出て見た 外山原は中々よい所だ 新

宮辺では一寸こんな所はみられん 広々とした平地

でそこには家一軒もなく皆きれいなシバがはえてあ

て柏かなにかの黄葉した林がある。その下を時々肋

骨の服をつけた騎兵や軽い服装した西洋人などが白

や鹿毛などの馬に鞭むちをあげてぬふて行く 丸で異国

へでもきた様だ そこで十一月の暖い日光をあびて

きれいなしばの上に仰臥して様々の黙想にふけた。

三時半すぎ野球に勝つて勇む平井らと野辺の一筋道

を通つて早大の前を通つて家についた 冬樹と叔母

様は永山へ行って帰つた所であつた

冬樹は新宮でいふ永山のことかと思つて「永山等へ行

くのは厭、いや。」といふて居たが行って来てまんぢゅー

をもらつてきた

夜は高橋が呼びにきて高橋の所で遊んで八時半帰る

拾壹月拾七日 晴

八時起床 直に朝風呂へ浴ひり一週間の垢を落す 兄

貴の所へは大塚かなんとかいふ男がきて居る

午後は高橋と浅草に行く 西の市なのと日曜なのと

で大層な騒ぎで活動写真に入ったが少しも見えな  
た<sup>(ま)</sup>

漸く一時間位して見える様になった。活動写真も中々  
面白かった 帰りに汁粉を食いて帰った

拾一月拾八日 曇

第五限植物の時日本人の南米に於ける有様を話して  
もらふ 中々得る所が少くなかった

帰途くづ山で野球の稽古をして三時帰宅す

帰宅後叔母様の荷物をこしらへる手伝をなし明日の  
独語のかき取りを予習す

拾壹月拾九日 火曜日 雨

第一限独逸語書取りは満点を得た

第五限体操は雨のため繰り上げとなる 有難きこと

この上もなし

帰宅後高橋君来り高橋のうちに至りて遊ぶ

それよりベルリッツ読本をよむ 難解の句多し

夜は作文を作る 八時半眠むる

十一月二十日 曇

第一限図画 学校の庭の菊の花を写生す

放課後印度人が回教のことについて話したさうだが  
きかなかつた

飛行船の通るを見る 風が強かつたから困難であつ  
ただらふ

夜は高橋来りて面白く遊ぶ それから少しく植物を  
さらつてすぐねた。

拾一月廿一日 木

第三限植物の時試験をやると思つて復習して居いた  
らしなかつて張合抜けがした。

帰宅後叔母様と冬樹とは神楽阪へ瓦斯の道具を買ひ  
に行く 一人留守をする 留守をして居て寝て了つ  
た

夜は習字した 高橋が来て独語を教へてやつた

拾一月廿二日 雨 金曜日

第五限体操の時文部省の視学官とかがきた。皆うまく  
やつたのに私一人間違つて目に立つた 後から先生<sup>(先生)</sup>

に睨まれた 実に大変な目にあつた 視学官といふ

ものは悪いものだ

帰宅後学校の荷物を忘れてきて雨がふるのにてく行くてきた これも視学官の所為かも知れぬ

うちから電報が替がついた この頃は毎日秋刀魚を食ふ 故郷の風味も大分あいた頃だが矢張美味くて食って居る

父上の手紙を拝見す

夜は作文を作らふくと十一時迄起きて居たが修学旅行をしてから大分日もたつて居るのでうまく作れない 十一時半就眠

拾一月廿三日

大祭日か小祭日か知らんが今日は休みだ 生憎雨で困る

休みが二日つづくと思へばすぐ雨だからたまらん

叔母様と冬樹とは人形町へ反物を買ひに行くししかたがないので昼迄寐てやった

午後からは野球友達が沢山きて高橋のうちでわいわい騒いでやった

それから手袋を買ひに行った 漸く一つ買ってきたうちでは高いと攻撃せられた どうも困ったものぢや

ぢや

夜はヒルツ読本の訳をつける 矢張りむつかしいわい

八時前寐る

拾壹月廿四日

今日は少しく天気がよい

早朝風呂へ行ったら早々<sup>つ</sup>つて浴槽のふちの石で胸をうんといふほどうって暫くはものをいはれなかつた

帰ってからもなほいたい 痛いはづだ肋骨が二本折れて居る 真逆これほどでもないが赤くくろにえて居る 少し手でもあげると大層痛む 明日は体操休めるぞ

高橋来りて彼のうちへ行く 帰宅後冬樹が車挽きの子に泣かされてきたので泣かしに行きてやった

午後からは皆留守 吾輩は友達五六人と富山原<sup>ひ</sup>へ野

球をしに行たが矢張り胸がいたので休む

毛唐がネットをはって居る所で野球をしたら一毛唐怒りて曰く You must not play baseball と怒ったが皆四年の奴も居たが英語はわからん 漸く吾輩がやくをつけてやったら皆怒ってけんかしてやったら、ブー云って帰って了った それから外山で遊んで薄暮帰った 夜は十一時迄大勉強 父の所へ手紙をかく 作文の代りに独乙語をやくして送らふと大に骨を折った

十一月廿五日

第五限植物試験あり 風媒花と虫媒花の区別は知って居たが単葉と複葉の区別には閉口頓首した しかし八十点は取れるだらふ

帰宅すれば叔母様は明日の大掃除をして居た 冬樹もせつせと手伝いかなにか知らぬがやって居たが庭の植草を皆抜いてしまつて叔母様に叱られて目を小さくして呆気にとられて居た 大方庭の草で取てやれと思つてしたことだらふ

明日の独語の書取りを調べる

夜は父上のもとに手紙をかきヒルツ読本の訳をつけてみる 夜更しして十一時に寐る

拾一月廿六日

昨夜夜更しした御陰か眠くてたまらぬ

叔母様は早くから掃除のしたごしらえに余念がない

冬樹は寒い／＼と炬燵へもぐりこんでいふて居る

第一限書取りは皆出来た。先生に羅馬の貴族と人民とが反目して絶へず争のあつた「やりエンチ」といふ英雄が民間から現れて大革命をすることなど面白く話しをしてもらふ

帰宅後今村と本郷南江堂に至つてガリバ旅行記の独訳のさまで難しくないのをかつてきた 字引（前）を便りに読めんこともない

夜は高橋とこへ行て独逸語を法学士にきいてきたそれから一寸神楽坂の縁日を覗いて帰つた。早やく寝た。兄貴は有樂座へ行て留守。

拾壹月廿七日 寒さ厳し

学校は無事平穩

帰宅してからガリバアの旅行記を炬燵の中で繕く  
中々難しい とても字引によってもよめにくい。

夜はウンケル氏の宿題を書く 非常に巧く出きた  
亦十点もらへる 八時半寐る

拾壹月廿八日 木曜日

第三限独逸文法の時に外山先生から大演習参<sup>(題)</sup>歡談を  
聞いた 第五限ウンケルの会話文法のことを習った  
が日本語が入らないし入っても咄<sup>(題)</sup>いから何を言ふて  
るのや(ら)さっぱりわからなんだ

帰宅後叔母様と冬樹は浅草の国技館へ菊人形を見に  
行って一人留守。高橋と今村が独文読本直訳を売っ  
てる所をき、にきたが知らないので教えてやらなかった  
辞書を頼りにガリバア旅行記を半頁許りよんだ 留  
守して居て炬燵の中へ寐て了った そのうちに兄貴  
が戻って散々小言を食った

七時頃叔母様帰る 冬樹は自転車の曲乗りの面白

かったことばかり話して居る 夏樹さんより巧い  
そーだ

独文読本をよむ 今迄の独文階梯と違つて非常に難  
しい句が多い きく所によると独文階梯の巻の式の  
原稿が火事にやけたので一からすぐに独文読本へ移  
るのださうだ それでもむづかしいのだ。十時半につ  
く

拾一月二十九日

学校には変りなし  
帰宅してから寒いのと腹が痛いので炬燵へ潜りこ  
んだ 夜は漢文の予習に夜を更かす

拾一月卅日 寒さ烈しく薄氷が張つてあつた

第四限算術の時試験が二題出で一題違つた 惜しい  
ことをした

午後から演説会に行つた

高島平三郎先生の開会の辞に始まつて「大正年間の一  
大要求」とか色々面白くない演説を沢山聞いた 皆咄<sup>(題)</sup>  
い 四年生の森下の演説や五年浜の「男の歌」など少

しく異彩を放ったのみであつた。吾輩の卑見による  
と都会のものは座談に長じて居るが演壇に立つてや  
ると愚図<sup>グッ</sup>愚図<sup>グッ</sup>して下手だ 那須何とかいふ人の琵琶  
をきいた それから我校卒業生の演説をきいた 之  
は中々巧かつた 終りに菓子をもらつて帰る この  
菓子が目的なんだ 夜は大家に家賃をもつて行き高  
橋のうちに行ってきた

拾二月一日 日曜 晴

早朝風呂に入ってきた

九時過ぎから友達と学校の柔道部大会を見に行った

勝負は大分進んであつた

上級生の試合は大層面白かつた 中にも二級の織田

とかいふ人が三人抜き業は目覚しかつた

午後からは他校の生徒との試合を見た

農大、一高、高師其の他各中学の選手とやったが皆

押へ込みで参つて了ふ 実に残念だ 四年のなんと

か云ふ男が農大の大男を巴投したのは実に嬉しかつ

た 五年の森とかのもきれいであつた。燈がついてか

ら三段の人と二段の人との投形を見た 実に巧いも  
のだと感心した それから三段の石田といふ人が初  
段三人、二段二人との五人掛りの勝負も面白かつた。  
初の人も二番目の人もすぐやられた。三人目の奴が  
手の逆を取られて目を白黒して居たのも面白かつた。  
二段の人とは少しく張合があつたがこれも直ぐ敗け  
て了つた。それから賞品の授与で終つた。吾輩も来  
年からできるのだ

夜はしけんの準備して兄貴の洋燈のほやを買ふてき  
た

独文和訳

冬

冬は日が大層短くて夜がながい。

鳥の歌もやみ渡鳥は既に秋のうちに飛び去つた

蛙や其他の動物は皆冬蟄をする

樹々は落葉して了ひ小さき花すらみることができな

い

寒い風は畑や小道を横切つて吹く。雪も亦屢々降る  
愛する神は牧場や畑の上に白い外套の如く雪を横へ  
る

それで弱き若き植物は凍へて枯れて了ふ。

(まだありますが難しくて出きません)

拾貳月貳日月曜日

第参限体操の時試験をした

帰宅後明日の独逸語の書取りの予習をする それか  
ら独文読本の第九章冬の所を訳して父上の許に送る  
此の頃は独文の訳をつけるのが一番楽しみだ それ  
も字引を頼みとし難しいのを骨折つてやるのが猶面  
白い。訳をつけてからの楽しみは亦特別だ

冬樹は今日から幼稚園へ行く 大層面白くと言ふて  
居る 夜は学期試験の準備に忙しい。

拾貳月参日

第一限独語 書取は少しく違つた 第二限唱歌の試  
験には二番の「拍子とは如何」三番の「不等拍子に付知

れる所を記せ」は立派に出きたが一番の「変口調音階  
を書け」は薩張り出来なんだ 唱歌も乙になりさうだ  
帰つてからガリバア旅行記を読んだ 此頃は日が短  
いからなにする暇もない 新宮から熊野新報を送つ  
て呉れた 久しぶりで故郷の消息に接することを得  
て嬉しい

父上の御手紙拜見する ズボン送て下さるさうだ  
有難い 夏樹様の許へ手紙を書く 夜は会話の宿題  
を書く

拾貳月四日 水曜日

第一限図画。図画の教師が妙に俺を悪む。一生懸命に  
書いて行た図画で兄貴や友達に賞められた画でも「咄  
い これは絵になつてない」といふ。又、俺の名前を  
一寸もいはん。「でかい奴」と悔(悔)る。これだけでも残  
念だ。今日は俺が手本を貸して呉れといふと「貸され  
ぬ お前みたいな者はなにを貸してもかけるものか」  
と悪罵を浴せかける 平井が「こんどの図画の時うち  
でかいてきてもつてきてもよいか」といふたら「よい」



といふた癖に俺には悪るいといふ。他のものが肖像画

をかいてもって行つたら受取るのに、俺がもって行く  
と「この前肖像画は一年にかけぬからかくなといふ  
たのにかいてきた 命令を報あやじぬ奴は教室を出ろ」と  
いった 俺も残念でたまらぬから「はい出ます」と出  
てやつたら後からついてきて「御前は一体いかぬ 年  
を喰つてるからだ」といった。俺はなにもいかぬこと  
をしたことをしたまことではない。「年喰つてない 十五  
だ」と云ふと「御前は一体口返答するな 口返答する  
となぐるぞ」といふ「なぐつてかま（は）ん」といって  
やつたら流石になぐらなだけど「たつてる」といつ  
てたした。意地の悪い奴で大分老人のくせにいつ  
も生徒をいぢめる奴で生徒間の評判のよろしくない  
奴だ。そのくせ校長にとりいつてる奴ださうだ と  
にかく残念だ うっかりけんかでもしようものなら  
すぐ停学だからどうも仕方がない しかしこの次生  
意気な口でもきいていぢめた時にはうんと野次つて  
やる 帰ってから兄貴に話したら兄貴も大に憤慨し

て居た。

第二限の歴史の時は徳川家康の面白い話しをきかし  
て呉れたがそれも耳に入らなんだ

帰宅してから習字をして風呂へ入つてきた。

夜は叔母様は冬樹をつれて神楽阪の縁日へ行つた

一人留守する

拾貳月五日

第五限会話 今日は大変よくわかつた。

帰宅後習字の清書をして四時半に至る

新宮よりの小包落手 「乃木大将言行録」「十二傑」洋

袴など有難く頂戴す づぼんは古い方が破れて居

て困つて居た所だからわけて嬉しい 「乃木大将言行

録」「世界十二傑」も嬉しい 而し十六日から試験だ

さうだからすんでからゆつくり読まふ。

スリミ中々甘マしい 東京ではなかなか喰べられん

叔母様や冬樹もチビ喰いして居た。

明日の国語算術の予習して九時就眠。

拾二月六日 金曜日

第三時間習字 先生が休んだので熊襲といふ漢文の教師が代りにきた

帰宅後今村と本を買いに行った それから高橋を訪れて四時前帰る

夜は兄貴の本を買いに神楽阪迄行って来た

内閣総辞職した号外を一二日前に見たが誰が後継するだらふ 今日には学校でも大分問題になってあつた

独語と地理の復習をする そろ／＼試験だから奮闘しなければならん

拾二月七日

第四限算術の時あつた うまくできて満点もらった

帰宅後兄貴の使にゆく 今日には土曜日だから「乃木大将言行録」をよんでもよからふと思つて三時半迄読む

今更その人格に感服した

高橋にもらつた独語新聞をよんで見た。

夜は地理をやる 不得手なものだから一生懸命にやらねばならん 九時就眠す。

拾二月八日 寒さ烈し。

四時半起床 父上に書を致す。

六時風呂に行く 誰も行てない 漸く七時頃出る時に一人位来た 誰もなかつてきれいだつたのはよいが熱かつたのには弱つた

帰つてから新宮よりの手紙を見る 御金頂く

冬樹を連れて郵便局へ金受取りに行く 途中高橋に出会ふ。叔母様と冬樹とは大田へ行く

午後からは高橋にさそわれて仕方なく外出する算術の本の通解を求めて帰る

夜は地理の暗記する 今日風強く寒さ烈し 少しく歯痛する 冬樹は生駒さんそこへ手紙を出すといふて居た。

拾貳月九日

第三限体操の試験あり 第二限算術の時中る

放課後平井が独文読本講義録を買ひに行くといふたので一しよに行てきた 本郷たさうだ 漸く探しあつた東京独逸語学院と名前はよいが破屋の様なうち

だった 四十位な薄汚ない紋つきの羽織をきた先生といふ様なのがで、きて講義録を見せてもらったからト一写版の頗る不明亮(感)な物で期待した程の物でなかったからやめてきた。貧相な先生の顔には当てが外れたといふ様があつた 相当に出来る人らしいが貧しくて人が相手にせんのであらふ 気の毒に思つた。それから南江堂へ廻つて独逸語の御伽話の本を買ふてきた 思はず遅くなつて六時帰宅。夜は明日の独語の予習をして地理の暗記する。

拾二月十日

歯痛甚し。

第一限独乙語 第拾三章「時計」の所を習ふ 難解の語句多し

第五限体操の試験あり

帰宅すれば皆留守なり 叔母様は冬樹のマントを見に白木屋に行きしならん 五時頃帰る 気に入りましたものなかりしと 余は其間作文の清書をなす 夜は地理会話の復習に夜を更かす 夏樹さまよりの英文

の手紙よみにくき所ありき 兄貴読みて苦笑せるを見れば兄貴の結婚問題のことならむ 十時就眠

拾二月拾一日

第二限歴史 徳川家康の話してもらふ

帰宅すれば今日も亦皆留守 冬樹の外套を見に行たのぢやる。明日のユニケルの宿題をしてすふ 熊野新報と大阪毎日と送つて呉れる

夜は会話の暗記して地理の復習する。

拾貳月拾貳日

第五限ユニケルの时会話がうまかつてほめられた年賀状の書き方を習つた 来年は独逸語で出すぞ

帰宅後算術の宿題をやる

五時頃叔母様帰る 私の羽織を買つてきて下さつたのだ 羽子板買ふてきたがあんまり悪い羽子板なので智慧には送らず冬樹も欲しいと言ふて居るのだから冬樹のにした

此頃大層白歯が痛む 今日なぞは特に甚だしい 拾八日から試験ださうなが一番始めは多分独乙だら

ふからこれを復習した

今年も後廿日よりないのだと思ふと遊んでは居られぬ 今日学校からの帰途江戸川の終点近くで阪野さんと赤松の保さんといっしよに行くのにあつた「遊びにこい」といふて居た。

夜は独語さらつて九時半ねむつた。

拾二月拾三日

第五限体操がくりあげになつた 大喜びた

兄貴の学校は十六日からしけんださうだ

吾輩の方は十八日より始まるとの噂あり。

今日御金がかぬさうで叔母様大層困つて居る 米屋の代をまってくれと吾輩にいはした 生れてから始めてだ ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㉿ ㊿

大村から借りた作法の本よむ 修身試験の予備

夜は高橋にかしてある植物の筆記もらい〔に〕行つてくる 植物さらつて拾一時半就眠

拾貳月拾四日 はれ

第三時間目の休みの時間に試験の掲示がでたそうだ

が知らなかつた 帰途友達に聞いて驚く 高橋も今村も写してない 芝の友達の所に行つて写してくる 電車代金九銭のそんなり。

帰つてから一生懸命植物をつめこむ 試験掲示には会話と植物が十九日にある こいつには少々弱つたそれから廿四日の算術と漢文 算術はよいが漢文が少し世話だ 四行位の和文漢訳が六つもでるそうた しかもそれが応用ばかりときたから大変だ ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㉿ ㊿

今日も亦金がかぬ 叔母様のまち方一通りでない 御蔭で吾輩の小遣錢も弱つてきた 恐らく年末で郵便局がつむのだらふ それとも毎日留守になるので受けとれないのかもしれない

夜は十一時迄つめこむ 火の気もなにもないようにしてやると一層よくつまる。昨夜の御蔭で少し眠い 新宮では夏樹大人もやつてゐるだらふ 今日夏樹大人から注文の本これも金がついてから送ることにしよう 今冬樹が寐とぼけて居る この頃毎日幼稚

園へ行くので大分賢い子になった 此の間松阪屋へ行ってそのもどりにくふてきたパンを毎日嬉しがって喰べて居る 矢張り新宮よりチンが少ないのだから ふ しかし蜜柑があるから大分助る 今度のみかんはじつに美味い 友達がくれくれいふて困る 十一時眠<sup>る</sup>寝。

拾貳月拾五日 めづらしく雨ふる

八時起床直ちに風呂に行く 帰宅後植物の筆記に急<sup>ぐ</sup>はし 十八日よりしけんなれば中々骨なり。午後からは今村宅に至りて独乙語の試験準備をなす 独文階梯の方は容易なれど独文読本は中々難解の句多くして頭を悩ますや甚し

父上よりの御手紙拜見 図画の教師の事についての御誠め涙こぼるゝばかりなり。

拾二月十六日

帰宅後叔母は宇多先生の所に行ったやうだが生憎今日は吾輩錠をもって行かないので入ることが出来ずおまけに小便が出たいし共同便所はなし 高橋の

うちにかけこんだ

三時半頃帰る 夜は六時前にねる そして十二時に起きて叔母様のこしらえて下すつたかきもちで目をさまして三時半迄独乙語をやる 大層よく覚えられた。四時日記つけてねる。

拾二月十七日

昨夜の睡眠不足のためかちよつと頭が痛むのを無理に六時半起床。第一限独乙語の時にしけんに出さうな処を教へてもらふ 第五限体操はくり上げ 帰宅して今村のうちへ独乙語をさらへに行てくる 夜は五時就眠 又十二時起きる 三時半すぎ迄独乙語の試験準備する 充分準備する これなら大丈夫だ。

拾二月拾八日

初日のしけんだ 八時始まり第二時間あり 訳解の方は欠点なく出きたが、文法の作文には *Dieser* を *Der* と誤たのは玉に疵だ しかしこれでも間違ひぢやないさうだ 十時帰宅して明日の会話を

復習する 常から読んで置いたので大丈夫だが二時  
間目の植物には大閉口だ 本を丸呑みにかゝる 夜  
は一時起きて四時迄大奮発をやる 高橋のうちの近  
くに火事があつて少からず驚いた。

拾二月十九日

十一時始まるのだが八時頃登校して平井と永楽病院  
や鬼子母神の方へ行ってさらつてきた。

会話は平気なもの 植物の葉の構造や多年草、無限  
花序は皆出きた 里芋は植物学上何にかといふのに  
は少し弱つたがこれも地下茎の球茎とかいて出きた  
今日も成巧だ 帰宅後は呑気に遊ぶ 明日は国語だ  
から五時に寝て二時半に起き一時間勉強して眠る

拾二月廿日

十時始まりなれば悠々と行く

得意のものなれば間違のあるはずなし

三番の「暮目」といふのを多くものはバクモクガマ  
メなどとよみその訳には「でかい目」とか「光る目」な  
どかいてあつたのは笑止千万だった

明日は地理 常から少し読んであるが八十頁もある  
んだから物騒でたまらん 帰宅後五時迄やり五時か  
ら一時迄ねて三時間やる 総計八時間やったが頭が  
混乱してたまらん。

拾二月二十一日

十一時始まりなり

一番の九州及び中国地方の学校及び師団を記せには  
皆大閉口だ 吾輩も胡摩化しぞこねた 今日迄うま  
くいったのに残念だ 帰宅後は今村とやけ遊びした  
夜は父上の御手紙及び金子頂戴す。母上御持病にて  
御悩みとのこと心配にたえず 大分よろしとのこと  
なれば稍々心を慰む。

拾二月廿二日

毎日雨ばかりにて実に困る 朝風呂を浴びてきてす  
ぐひるまで安眠を貪る

午後は今村宅にゆきて歴史をさらふ 五時頃帰る  
夜は一時に起きて二時間修身をやる

十二月二十三日 午前八時半頃迄霧深。

歴史と修身 得意のものばかりなれば出きぬはづなし 修身の三番「馴も舌に及ばず」といふのを違つたものが非常に多かつた

一時帰る 皆留守になつて独り日向で算術をやる。修身に応用が出たから明日の漢文にも出るだらふと思つてさらふ。

夜は八時頃高橋来りうるさくてしようがないので送り出してやつた

一時より一時間漢文をやる

拜啓

母上様御姉様 御病気とのこと心配に絶えず只今も皆にて打案じ居り候。父上様にもさぞ不自由なことと存ぜられ候。

私今日にて試験了り申し候 大抵は出来候らへども詳しくは日記にも有之候はゞ御覧下度候。昨日鯛の乾物と蒲鉾、猿金、有難く頂戴仕り早速賞味仕まり候 鯛の乾物特に美味く頂き申し候 秋刀魚の塩ものも毎日賞味仕り居り候。

智恵子の人形姉上様よりの御葉書拝見致せし時は既に買求めし後に候しより明日御送り(夏樹様の書物と)申すべく候

冬樹毎日<sup>④</sup>初稚園に参り沢山歌を覚え候 之れは「今度新宮へ行た時御父様にきかせてあげる」と毎日大声あげて家中を飛び廻り居り候。又指折り数えて正月を待ちあぐみ居り候

日記遅く相成り真に恐縮致し居り候。

十二月廿四日午後八時半

敬具

父上様

拾貳月貳拾肆日

本日は算術と漢文

算術は思いの外難しかったが皆出きた

漢文は三番の「門地にかゝはらず」を漢文にするのを門地不拘。と書いた 後から考へると馬鹿馬鹿しくつてたまらん 漢文は又乙だ

帰宅後入浴する 午後は久しぶりにて呑気に遊ぶ 今村と高橋のうちで遊ぶ 向畑（紀州古座の）が高橋のうちに下宿して居る

斬髪して帰る 夜新宮よりの報に姉上も亦病とのことにて家内一同皆心配する。父上の許に日記送る 遅くなりて申しわけがない

拾貳月二十五日

本日より愈々冬休みだ

九時半迄眠る 午前中は冬樹と悪戯をやる

午後友人来り友人の宅に今村高橋向畑等と行く 廻覧雑誌を作る相談をきめた 早速種種手筈を定めてるうちに遅くなったから泊って行けと言はれて戻つ

てこようと思たが皆泊るので仕方なしに泊る。

拾二月廿六日

八時半頃帰宅す 叔母様に心配かけてすまん これからはどんなに遅くなっても帰らふ

午後からは叔母様冬樹つれて神楽阪へ行つたから一人留守番する 乃木大將言行録を炬燵の中でよむ 少年時代の苦学の「など」に少からず感奮する 実際 將軍は自分の最も崇拜する偉人だ

拾二月二十七日

午前十一時登校す 今日二学期の成績がわかるのだ 成績発表を待ちかねる

通信簿を見れば四番に下つた 四番の田中が三番になつて一番が二番になり二番が一番になつた 五番もさがつて六番が五番になつた 平井は六番になつた 矢野は十八番だとか

とにかくがっかりした うちで怒られるは覚悟の上だが父上には知らせたくない さりとして知らせぬ訳にはいけないからせめて松のうち三日を知らせて新



年を迎へてからお知らせしよふ

帰れば叔母様に大目玉を食ふ 之れには返す言葉もない 三学期には必ず好成績を取らふ。凶画の教師のおかげで品行も中に下った。

午後からは独り留守 夜は乃木大将を読もふと思ふたがその元気もない。あゝ新宮では如何に父上が待ち兼ねて居られるであらふか ああ。

十二月廿八日

八時起床 朝風呂で心配を洗ひ落とす。それから凶画一枚を書く

午後からは行きたくもないが約束で平井宅へ行く 乃木將軍殉死可否論を始む おかげで茶をこぼして着物をぬらした 帰へりには雨にふられて大弱りだった。牛込柳町へ今度電車が開通したのだから肴町込乗って来ればうちまで半町位だのに神楽阪下込乗って大馬鹿を見た。

雨もどうやら雪にでもなりさうだ

夜は乃木將軍伝を繙く 十時就眠

【欄外】本日新宮よりの小包拝受す。羽織着物有難く

頂戴す

十二月廿九日 積雪一尺

思った通り一面の銀世界 初雪だ 三寸位は積って居る 益々降るから今に一尺にもなるだらふ 冬樹は珍らしくてたまらず叔母様がとめるのも聞かず庭の雪をいぢつて居る。

起き様としたが寒くて又炬燵にもぐりこむ。漸く朝飯を終へたころ高橋にさそはれて雪の模様を眺めに行った。

午後からは今村宅で遊ぶ 雪益々烈しくふる。

十二月卅日 天気よし

どこへ行っても年の暮は忙しい

朝十時頃秋山来る

午後は高橋のうちで雪団子を作つて方々の家の中へなげこんで怒鳴られた。今村と新年の雑誌を買ひに行つてきた

夜は乃木將軍と豊太閤伝とをよむ 一夜に二人の英

雄にあふの感あり。

十二月卅一日

大正元年も今日でゆく。十五の年も今日限り。

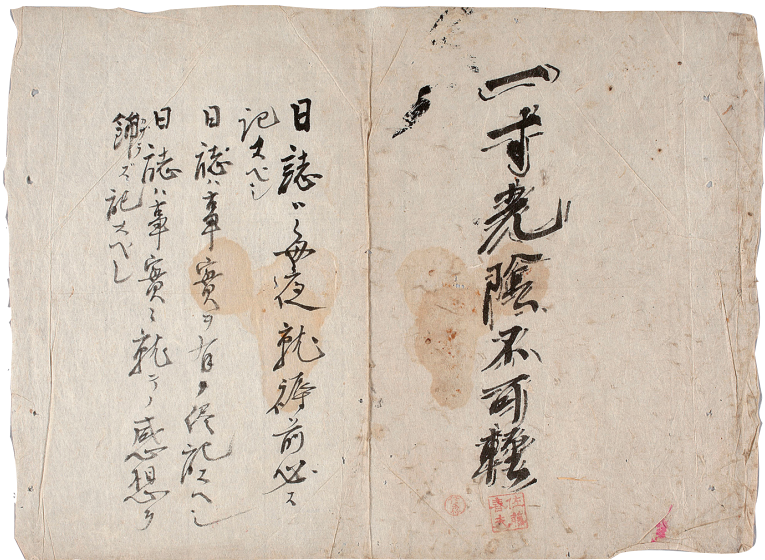
思へばこの一年も無為に送った。四月両親の手をはなれて上京したが覚た「は親父のすねをかぢるのが一寸上手になつたばかり。かくてこの年も逝く

午後からは豊太閤伝を一気に読む。夜は星祭りの賑は少しみて帰る

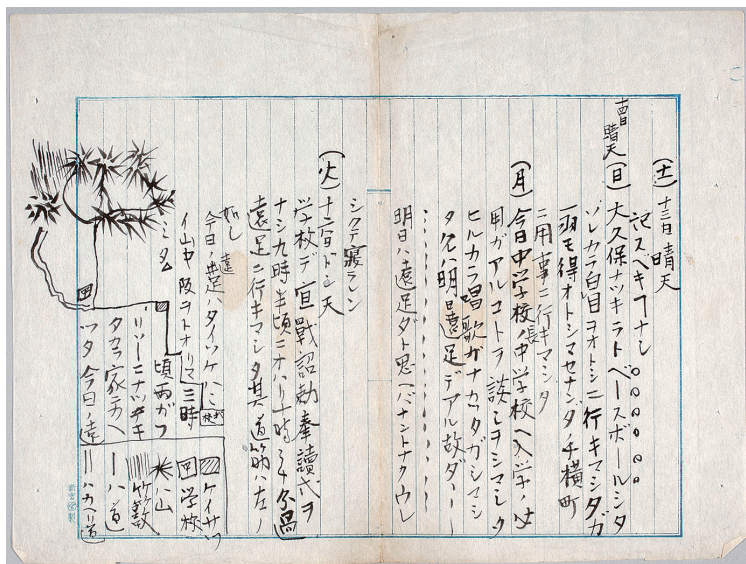
父上の御手紙拝見。情多き御手紙を見て父上の膝下に跪く思あり。成積(成)のことの御尋へ身をきらるゝ、より心苦し。十時就眠。大正元年はゆく。

大正元年 以上。

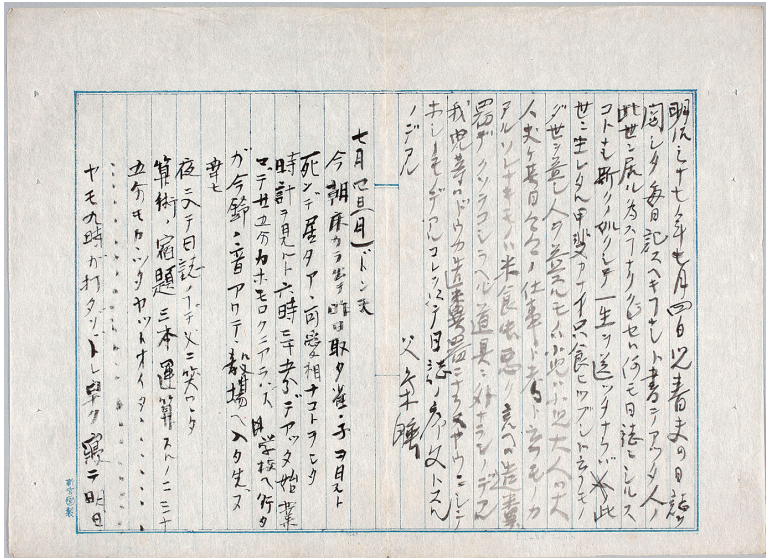
付記 このたび資料の翻刻紹介を快くお許しくくださった高橋百子様にご心より御礼申し上げます。なお、本稿は JSPS 科研費 18K00289 による研究成果の一部です。



明治 37 年佐藤春夫日記 表紙  
 「一寸光陰不可軽」と題し、父豊太郎による 3 ケ条の注意書きが見える。

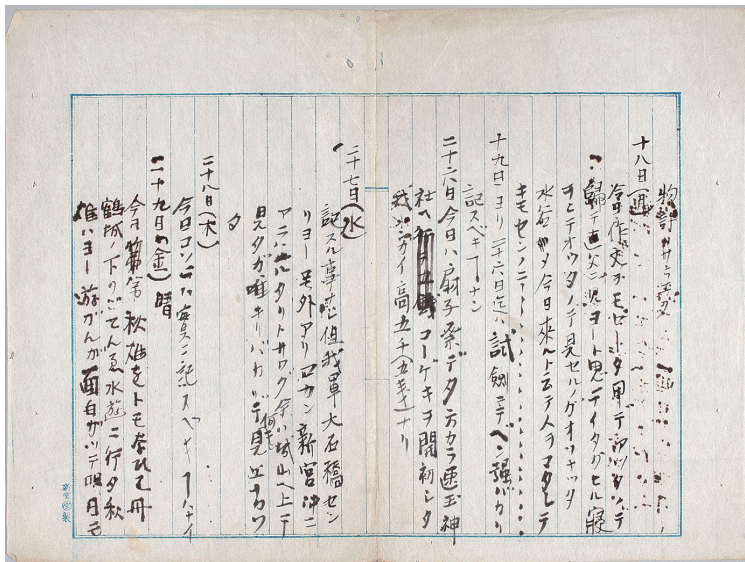


明治 37 年佐藤春夫日記 10 枚目  
 2 月 13 日 -16 日。高等小学校卒業間際。遠足の行程が絵入りで記されている。



明治 37 年佐藤春夫日記 23 枚目

7 月 4 日。「記スベキ」ナシ」の連続になった息子の日記に父が説教を書き込む。



明治 37 年佐藤春夫日記 27 枚目

7 月 17 日 -29 日。日露戦争のさなか、新宮沖にロシア艦出現の風説があったという。